good morning N°5

～ 祝・結成13周年記念公演 ～

『ただやるだけ』

作　澤田育子

2020.11.19 ～ 12.13
下北沢シアターイー

【登場人物】

マヤ…屈辱不動産社長

電田…屈辱不動産社員

風子…屈辱不動産社員

速水…のりえ（のりお）の息子

のりえ（のりお）…測量的人間。マヤの同級生。速水の母であり、父

亜弓（水泳部監督）

バイク（西島）

宮本武蔵

天皇陛下

小野寺…水泳部部員

チッチ…マヤの同級生、生物部、選挙支援団体員

謡子…マヤの同級生、生物部、選挙支援団体員

かめこ…マヤの同級生、生物部

長井和貴子…バイクの下半身、候補者

砂の精

【1・屈辱不動産】

激しい強風と波音。明転。床面は白砂。不動産屋。傍目には場所は不明。重厚なデスク。デスク上に足を組んで座る、人工芝で誂えたスーツとヒール姿の不動産屋の女（風子）。客である男（速水）、ソファに座り、傍目には、一体何の資料かは不明な分厚い物件の資料を眺め熟考している。黒電話の受話器（に見立てた黒いヘッドフォンのような物）を頭にはめた黒スーツの男（電田）がひっそりと存在している。

風子「…決まりました？」
速水「いえ、まだ」
風子「…弱いほう？」
速水「え？弱いほう？？」
風子「決断力」
速水「ああ。僕、ですか？」
風子「…」
速水「いえ、弱いほうでは、」
風子「じゃ、どうして？」
速水「どうして？？いやあ、決断力は弱いほう、ではないと思いますが、いや、かといって、ねえ、強いか、と言われると、ああ、でもまあ、そうですね、強いほうかな、って感じですかねえ。はい」
風子「…」
速水「（あれ？）決断力って強いとか弱いとかって言いますっけ？」
風子「…」
速水「なんかあれだなあ、あれですよね、強いほう、」
風子「強いほう？」
速水「とか、弱いほう、」
風子「弱いほう？」
速水「とかって、ねえ、なんか女性に意味ありげに聞かれると性欲とか精力のことかなとか思っちゃいますよね。あははは」
風子「…（脚を組み換えパンツをチラチラさせる）」
速水「…」
風子「…（脚を組み換えパンツをチラチラさせる）」
速水「…お。あれー？なんか、サービス、ですか？、なんつて」
風子「…（脚を組み換えパンツをチラチラさせる）」
速水「いえ、あ、はい、サービス。だってほら、そうやって、ねえ。脚を組み替えて？僕に向かってチラチラさせてるわけですから」
風子「…（脚を組み換えパンツをチラチラさせようとして、しない）」
速水「自由、ですね、サービスと捉えるかどうかは各自の自由。うん、だってそうじゃありません？サービスって、万人に当てはまるわけじゃないですもんね。ほら、牛丼屋とか行くと、次回使える大盛り無料券とかいただくことあるじゃないですか。サービスで。僕、いらないんですよ、その大盛り無料券。見た目ほど食べないんで。サービスと思ってくださったんでしょうけれど、いらないんです。でも、捨てるのは申し訳ないですからね、誰か喜びそうな人間を探すわけです。その一手間！正直迷惑な話です。ですから、サービスってとっても難しい。それぞれですから。喜ぶ方もいらっしゃれば、非常に不快に思われる方もいらっしゃる。かもしれない。アナタのパンツチラチラを。うん、受け取り方は各自の自由。ただ、アナタが脚を組み換えてパンツチラチラさせるのも、アナタの自由であるわけだ」
風子「…」

速水「…（資料を見て）いやね、色々それぞれ条件が異なりますでしょう？こっちを立てればこっちが気になる、みたいな、ね。全て理想通りなんて無理なことぐらいわかってますから、一体何を優先すべきか、自分にとっての譲れない点は何か、迷うわけですよ。想像力をフル稼働させて脳内シュミレーションです。ですから、決断力が、弱い？、というよりは、そうですねえ、想像力が、弱いのかも、しれないですね、はい」

強風。

風子「意味ありげ、でした？私」
速水「え？」
風子「『女性に意味ありげに聞かれると』、ってさっきアナタ仰られたから」
速水「ああ、いえ、あれ、何となく話の流れでそう言っちゃっただけでして」
風子「強いんです」
速水「え？」
風子「強いんです、私」
速水「えっと…（性欲？！）」
風子「意味ありげ風（かぜ）が」
速水「え？」
風子「私、意味ありげ風、吹かせちゃうんです、かなり強めに」
速水「はあ」

強風。
女、唐突に意味ありげに片足のヒールを飛ばし、脱いだ方の足を突き出して男を意味ありげに凝視する。

風子「…」
速水「…え」
風子「…」
速水「あの、」
風子「…」
速水「あ、拾って履かせろってことですか？」
風子「…」
速水「ちょっとよくわからないですけど…」

男、ヒールを履かせようと近付く。

風子「そのガラスの靴が私にピッタリはまったら、私はアナタにとっての運命の女ってことやね」
速水「え？いや、だって、これアナタが履いてた靴ですから、そりゃピッタリはまるに決まってる、そうでしょう？え？」
風子「男はガラスの靴を拾い決断しようとしていた。どちらかというと強い決断力で」
速水「いやいや、ちょっと待ってください、え？だってこれ、ほら、ガラスの靴でも何でもない。というか、今さっきまでアナタが履いていた、ただのアナタの靴！アナタにピッタリはまるに決まってますよ！え？というと、あれ？なんですか？！、アナタ、僕に求愛されたい、そういうことですか？困ったなあ！！！」
風子「例え寸分前まで私が履いていた靴であっても、今！私にピッタリはまるとは限らないのです。女の足は特に浮腫むから。朝、出かける際には少し緩いくらいに感じた靴が、一日歩き回ると、一体どんなわけか、本当にこれ私の靴なの？、そう疑うほどキツキツになる場合もあ

るのです。肝臓を物言わぬ臓器などと申しますが、肉体の全ては物を言わないのです。決して思い通りになどならない。計り知れないのです。辛く悲しいことがあると、心が痛いなどと言って胸を抑えますが、本当に辛いと感じているのは脳みそであって、心臓はいつも通り動いているのでございます。一方、思いが先行して肉体の方が合わせてくる場合もございますよ。何となく体の不調を感じ、もしやこれは重大な病かもしれない、そう不安になり始めると、本来どこも悪くない肉体に痛みを感じ出すのです。いよいよ、病院に出向き精密検査を受け、結果、何の問題もないと医師から告げられた時のあの幸福感！」

速水「あー、あ、はい、僕も、一時期オナラを全くコントロールできなくなって、『オナラ出るな！オナラ出るな！』なんて思えば思うほど、出ちゃうわけです。パンッ！パンッ！てね。こりゃ尋常じゃねぇな、って思いましてね、勇気を出して病院に行ったわけです、」

風子「何科？」

速水「は？」

風子「何科に行かれましたの？そういう場合。肛門科？それとも泌尿器科？大腸の問題と捉えるならば内科かしら。もしくは、精神的な起因とするなら、」

速水「人間ドックですよ、会社の。すみません、勇気を出して病院に行ったというのはちょっと大袈裟でした。会社の人間ドックの際の問診で、ちょっと、聞いてみただけです」

風子「で？」

速水「体のどこにも異常はありませんでした！結果、オナラも止まった！いや、止まったんじゃない。コントロールできるようになった！」

風子「でしょ？」

速水「でしょ？？」

風子「だからね、私の靴だからと言って、私にピッタリはまるかどうかなんてわからないんです。この靴にピッタリはまったらアナタの運命の女になってしまう、そんなの嫌だと強く思えば、私の足は私の靴にピッタリはまることに抗うのです。ブカブカだったりキツキツだったりの結果になるのです。しかし！肉体が物を言わず、いいえ、肉体に物を言わせないほどの運命の力が働けば、私の意思や肉体に反して、その靴が私にピッタリとはまるわけなのです」

強風。

速水「…そうですよ！そうでした！僕は、アナタが意味ありげ風を強く吹かせちゃう人間だということを聞いたばかりだということをうっかり忘れてしまうところでした！」

強風。

速水「意味ありげ、ということは、実は意味など微塵もない、そういうことなのでしょうか」

風子「意味がない？」

速水「それが、意味ありげ風なのです！」

強風。

速水「げ！『小鳥は楽しげに歌を歌った』、楽しげに？、つまり、楽しくもないのに楽しそうに。本当は悲しいのに、さも楽しいかのように歌っている。だって本当に楽しかったら、『小鳥は楽しく歌を歌った』、ですもんね！ね！」

風子「何の歌？」

速水「え？」

風子「小鳥が、本当は悲しいのに楽しいかのように歌う歌」

速水「〇〇〇、とかですかね。あはは」

風子「…どうして、小鳥は楽しいふりを？悲しい時は悲しい歌を悲しく歌えばいいのに」

速水「生きている意味を考えるからですよ」
風子「小鳥が？」
速水「生きている意味を考えない人間なんていませんからね」
風子「人間、なの？」
速水「ええ、人間ですよ！それでいいんです！」
風子「意味ありげね」

強風。

速水「生きる意味を、生きている意味を、考えたことのない人間なんておりますか。何のために自分は生きているのかと、問うたことのない人間はおりますか。考えても答えの出ることのないこの難儀な問いを抱え続けることに幸福を感じる人間はおりますか。しかし、だからといって、この問いに対する正確な回答を見出せないからといって、一睡もできないような人間はおりますか。『人生において、無駄な時間や経験などない、失敗でさえ人生を彩る貴重な礎なのだ』、そんなナビゲーションをする啓発本が多いということは、自力ではそうは思えないからなのであります。当たり前のように皆がそう思えるなら、そんな啓発はいらないのですから。朝起きたら歯を磨こう、ウンコをしたらお尻を拭こう、そんな本は売れない。つまり、何のために自分は生きているのか、という問いが存在するせいで、ある種の無駄や失敗や屈辱が色濃く際立つというシステムです。生きる意味などが頭をちらつかないでくださるのなら、一体俺は何してるんだ、などというそれらのマイナス要素とは決別できるわけですよ！」
風子「『ウンコをしたらお尻を拭こう』、その本私買いたいけど」
速水「（ゼエゼエと呼吸しながら）え？」

強風。

風子「屈辱…」
速水「（ゼエゼエと呼吸しながら）はい？」
風子「屈辱、と仰られた？」
速水「えええ、そんな単語も発したかもしれません」
風子「屈、辱…。靴、に掛けた、ってこと？」
速水「はい？」
風子「靴に屈辱を掛けるぐらいなら、電話でも掛けなさいよ」
速水「電話？」
風子「アナタの母上に電話を掛けて、私には言えないアナタの屈辱の全てを告白するべきだわ」
速水「何言ってんだ？」
風子「早く。さもないと、母上の方から電話が掛かってきてしまいますわ！それこそ屈辱に塗れた電話が！」
電田「ジリリリリリリ！ジリリリリリリ！」
風子「ほら！母上からの電話です！」
速水「いや、そうとは限らないでしょう！」
電田「ジリリリリリリ！ジリリリリリリ！」
風子「早く電話を取らないと！」
速水「アナタの電話でしょう！アナタのオフィスの電話が鳴っているのでしょう！」

音楽。照明チェンジ。

電田「嗚っているのではありません！泣いているのです！電話は、ジリリリリリ！ジリリリリリリリ！と泣いているのです！」
速水「泣いている？何故？！」
電田「わかりませんよ！わかったら苦労しませんよ！ただ！悲しい知らせの予告、すなわち悲し泣きであるのか、嬉しい知らせを予期しての嬉し泣きであるのか！悔し泣きであるのか笑い泣きであるのか！電話を取るまでは私にもわからないのです！誰も電話を取らないとなると、ジリリリリリリ！ジリリリリリリ！…無駄泣きなのであります！しかし！電話が泣き出した際、人々は何かを予感する！『きっといい知らせに違いない』、『嗚呼、嫌な知らせがきたようだ』…何かを察するのです！」
風子「さあ早く！」
電田「ジリリリリリ！ジリリリリリリ！」
風子「さあ！」
電田「ジリリリリリ！ジリリリリリ！」
風子「さあ！」
速水「（途中からジタバタしながら）今！僕は百歩譲って、全力で察しようとしているのです！一体どんな電話なのかと！」
電田「ジリリリリリ！例えば！アナタが子供を誘拐された親だとしたら、この電話は誘拐犯からの身代金要求の電話であり、電話は愛する我が子の泣き声でもあるのですジリリリリリ！」
速水「（ジタバタしながら）残念！僕の子供は誘拐されてはいないし、僕には子供がいないのです！」
電田「残念！では誘拐犯という線は消えましたジリリリリリ！」
風子「踏めるの？」
速水「はあ？」
風子「タップ」
速水「タップ？」
風子「ええ、ずっとそうやって踏んでらっしゃるから」
速水「ジタバタしてるだけですよ！」
電田「ジリリリリリ！」
風子「不思議よね。タップはダンスの一種なのに、踊るって言わないわ。踏むって言うのね」
速水「タップなんて踏めませんよ！」
風子「踏んでるわ」
速水「だからジタバタしてるだけですよ！」
風子「あら。じゃ、世紀末がきちゃう！」
電田「♪ジリリリ！ジリジリ！」
速水「はあ？」
風子「世紀末がきたって狼狽えないことね」

強風。

速水「また意味ありげ風だ！その手には乗りませんよ。世紀末が唐突にやってくるものではないことぐらい知っているからです！」
電田「ジリリリリリ！ジリリリリリ！」
風子「（受話器を取って）お電話ありがとうございます、屈辱不動産でございます！！」

音楽。強風。
測量的肉体を持つ母上（のりえ）、登場。

のりえ「どれだけ待たせるのですか？ジリリリリリ！ジリリリリリリ！と言う電話の悲鳴を、一体幾度聞かされれば、オタクの電話は出ていただけるのですか？電話をダイヤルし、出ていただけた頃には世紀末なのであります！」
速水「母上！」
のりえ「母は知っています。すっかり成人男性となった我が息子が、」
速水「なんとか３万円代の部屋はありませんか」
のりえ「そう言って不動産屋を尋ね回り、」
風子「今日日３万円代の部屋？この大都会で？」
のりえ「そう鼻で笑われ続けてようやくたどり着いたこの屈辱不動産で！、やっとの事で差し出されたいくつかの物件を眺め、思い悩んでいることを！決して決断力が弱いほうではなく！どちらかと言うと強いほうである決断力を持っても決められない！、それを凌ぐ『比べてしまう力』が強いからなのであります！何事においても比べてしまう、比べることに関しては超一級測量士、自称人生の測量士資格を持つ私譲り！母譲りの特性なのであります！比べますよ、人間だから！あの人と私、どちらが美しいのか！、そんなことは序の口です！学生時代、友人同士でのランチ！」

音楽。
いつの間にかいるオカモチを持った女（マヤ）が存在している。母（のりえ）の回想、喫茶店。
マヤ＝母（のりえ）の友人、電田＝給仕、風子＝隣の客。

マヤ「すみません、私、お水で」
電田「かしこまりました」
のりえ「私は、セットドリンクでカフェラテを」
電田「かしこまりました」
のりえ「死ぬほどお金がない友人！いつもセットでドリンクを付けることさえ憚られ、無料でいただける、」
電田「お水でございます」
のりえ「そして無料で頂けるお水と共にその店で一番安価な、」
電田「サンドイッチでございます」
のりえ「嗚呼！せめてアイスコーヒーと共に頂いたならば、その安価なサンドイッチももう少し美味しくなるだろうに！風呂なしトイレ共同、使用限度１０アンペアのアパートに暮らしながらアルバイトに明け暮れるその友人が、安価なサンドイッチを無料の水で流し込む姿を憐れみながら、親から仕送りを頂けていた身分の私は少しリッチな、」
電田「ローストビーフサンドとセットのカフェラテでございます」
のりえ「美味しそう！かわいそうな友人！私の方がかわいそうではない！しかしつかの間！隣の席を見れば、」
電田「季節の鮮やか魚介乗せパスタとセットのランチワイン白、でございます」
のりえ「嗚呼！あちらの方が美味しかったのかもしれない！意外にも量も多そう！値段だって私のオーダーしたものより３０円安い！私の方が、損してる？！そんなことを比べるわけです！」
電田「ジリリリリリ！ジリリリリリ！（受話器を取って）はい！喫茶紅天女！わわわ！申し訳ありません！（マヤに）おい！」
マヤ「！ごめんなさい…」
電田「毎回毎回、ろくに出前もできねーのかよ！」
マヤ「ごめんなさい…私、どうしても、観たくて…この今世紀最後になると囁かれる舞台、大帝国劇場での『意味ありげ風』の上演！」

音楽。

マヤ「だけど、私にはお金がない、チケットなんて買えるわけがない、わかってます、そんな折、大帝国劇場への出前の任務！ちょっとだけ、ちょっとだけ、そう思いながら、楽屋口からロビーへまわり、客席の扉をそっと開いた。『意味ありげ風』上演中！私は、配達すべきオカモチ片手に、舞台上で繰り広げられる全てを脳裏に刻もうと夢中になってしまったのです！（前出の女の演技を真似し、大女優然として）『肉体が物を言わず、いえ、肉体に物を言わせないほどの運命の力が働けば、私の意思や肉体に反して、その靴が私にピッタリとはまるわけなのです！』」

強風、音楽。

速水、差し出されたマヤの足に、風子が脱ぎ捨てた片方の靴を履かせる。

速水「ピッタリだ！」

電田「ジリリリリリリ！ジリリリリリリ！」

のりえ「（電話を取って）なんですって？！」

マヤ「（すっかり成功者の装いで）私、成功したわ」

のりえ「だったら！だったら私も苦労をしたかった！、そう嘆く私なのです！苦労の真っ只中にいる友人を哀れんでいた私です！そんな成功が待ち受けていると知っていたら、私だってその苦労を背負いたかった！なんと言う屈辱でしょう。友人の現在の成功を羨むあまり、友人の過去の苦労をも妬んでしまう！、苦労なく生きてきた自分の学生時代に幸せを感じることができなくなるのです！苦労をしてこなかったことさえもが、不幸に感じられてしまうのです！」

風子「（マヤに）社長、あの方（速水）、まだ決められないんですって」

マヤ「（速水に）さ、見せて。アナタの抱える屈辱を！ここは屈辱不動産！」

上空から、砂漠の白い砂が大量に流れ降ってくる。机の引き出しやオカモチの中からも流れ出る砂。

マヤ「都会の高層ビルの屋上に取り残された砂漠の中の不動産屋！屈辱を担保に、屈辱を保証人に、アナタの居場所を提供いたします！お客様が預けていった屈辱と言う名の一粒一粒の砂が集まるこの砂漠。私は、私の屈辱塗れの人生を担保に、この砂漠を手にしたのです！」

照明チェンジ。上空でパタパタと音を立てるヘリコプター。退場する一同。一人、ヘリコプターを見つめ、遅れて退場するマヤ。

【2・砂漠】

砂が降るのと同時に、女（亜弓）が飛行中のヘリコプターから歌いながらロープで降りてくる。
砂の妖精たちのダンス。

♪M1『懐かしき新世界』（詞：澤田育子　曲：中村 中）

気ままな旅に飽きたころ　白い砂　零れるの見た
あれは屈辱の砂の涙　私の中にも流れる砂

もう辱められたくはない　はずなのに
もう汚されたりはしたくない　はずなのに
誘われてしまった　舞い降りてしまった
屈辱を欲に変えて生きる場所
こんにちは、世界

ほら、やっちゃいなよと唆す　声がうるさい
ほら、やっちゃったねと嘲笑う　声がうるさい
砂で耳を塞いで　心の声聞かせて
屈辱を欲に変えて生きるのよ
こんにちは、世界

馴染むことなかれ
染まることなかれ
慣れるための努力なんかすることなかれ
忘れないで　アナタはアナタ
新しいのは世界じゃなくてアナタだから

亜弓「ヴァイク！」

バイク＋バイクの下半身が歩いてやってきて、

バイク「ブルンルンルンヴォンヴォンヴォンヴォン！」

バイクとなる。亜弓、そこにまたがり、銃でヘリコプターを撃ち落とす。煙を出して爆発するヘリコプター。

亜弓「バーン！」
バイク「フォーッ！」
亜弓「アタシという操縦者を失った今、孤独なヘリは命尽きるまで上空でアタシの帰りを待ち続けちゃうでしょ？でもアタシは戻らない。だってヴァイク、アナタに出会ったから。だからこの手で、アタシはアタシの愛したあのヘリを破壊した。バーン！それって残酷？残酷な天使のテーゼ。テーゼってなに？、って思わない？アンチテーゼは馴染みあるけど、テーゼ、って、ねえ。テーゼ、って普段使う？使わなくない？使い方わからなくない？あはっ、そりゃ人それぞれかもね、かもねそうかもね、どうかしら？本望じゃないかしら。愛する女の手で葬られたんですから。アタシだってそりゃ辛いわ。一度は運命だって思った相手を、この手にかけたんですもの。だから、痛み分けよね、でもね、運命の出会いって一度きりとは限らないのよ。
『君は僕の運命の相手だ』、なんて言われると、まるで永遠に続くかのように盲信しがちだけ

ど答えはノー。世界ってとんでもなく広い。運命の出会いって何度でも訪れるからご用心。これわりと人生のテーゼよ」

亜弓、とにかく格好つけて、色っぽく髪をかきあげたり、タバコを吸ったり消したり。その度に歓声をあげリアクションするバイク。

亜弓「ねえヴァイク。アタシって、言うことやる事なす事、格好良すぎない？」

亜弓、バイクにキスをする。照れるバイク。

バイク「ピッカピカピカ！」

亜弓「格好良さ命。アタシそういう女よ。自分の機嫌は自分でとるから！そういう女！」

強風。

宮本、登場。宮本、格好つけて立ち回るが、見向きもしない亜弓とバイク。

宮本「俺のこと好きな奴、集合！！！」

登場し、整列する宮本ファンであるモンペ姿の少女たち（マヤ、のりえ、チッチ、謡子）。少女たち、元気よく宮本の発言にレスポンスしながら動き回る。＊（　）内のセリフは同時進行。

少女たち「1、2、3、4！」

宮本「おう！今日は少ないな！よし！俺のこと好きかー？」

少女たち「はい！」

宮本「よし！なんでだ？（少女たち「なんで？なんで？なんで？なんで？」）なんで俺のこと好きなんだ？答えろ！顔か？包容力か？経済力か？家柄か？学歴か？答えろ！（少女たち「答えよ！答えよ！」）見ろ！（少女たち「見よ！見よ！見よ！見よ！見よ！」）俺を見ろ！見たか？見たな？見たか？三鷹！三鷹！」

マヤ「吉祥寺！」

チッチ「西荻窪！」

のりえ「荻窪！」

謡子「阿佐ヶ谷！」

マヤ「高円寺！」

チッチ「中野！」

のりえ「東中野！」

謡子「大久保！」

宮本「新宿！、よし！（少女たち「にょしっ！」）総武線！よし！（少女たち「にょしっ！ふんふんふんふん！」）男は強くなきゃならないからな！倒してなんぼだろ？倒してなんぼ！（少女たち「なんぼー！ふう」）な！答えろ！何を倒すんだ？（少女たち「何を？何を？何を？」）答えろ！見ろ！（少女たち「見よ！見よ！見よ！見よ！見よ！」）俺を見ろ！見たか？見たな？見たか？三鷹！三鷹！」

マヤ「吉祥寺！」

チッチ「西荻窪！」

のりえ「荻窪！」

謡子「阿佐ヶ谷！」

マヤ「高円寺！」

宮本「中野新宿！よし！（少女たち「にょしっ！」）中央線！よし！（少女たち「にょしっ！」）答えろ！何を倒してなんぼなんだ？」

少女たち「マンモス！！」
宮本「…マンモスだ！マンモス倒して、」
少女たち「パオーン！」
宮本「なんぼなんだろ？」
少女たち「パオパオーン！」
宮本「よし！」
謡子「今度宮本君の試合見に行ってもいいですか？」
宮本「来いよ！」
謡子「ありがとうございます！」
宮本「すげーよ、俺の試合！」
チッチ「マンモス倒したことあるんですか？」
宮本「石器時代と今をごっちゃにするな！誰か！水持ってる奴！」

少女たち、口に含んだ水を宮本の胸元に噴射する。宮本の服が濡れて肌が透ける。

宮本「サンキュー！透けてるよ！」
少女たち「知ってるよ！」
宮本「見ろ！透けてる！見ろ！慣れろ！」
少女たち「慣れてるよ！」
宮本「透けてる！俺の試合！こんな感じだぞ！」
少女たち「はい！」

宮本、突然、パリコレモデル気取りのウォークを披露。宮本を見つめながら、興奮してジェットコースターを模倣する少女たち。

少女たち「なに？なに？なに？なに？なに？なに？なに？なに？」
宮本「ミヤーモトーッ！！」
少女たち「格好いいー！キャーッ！キャーッ！キャーッ！」
宮本「よし！何だ？今の何だ？」
少女たち「マンモスー」
宮本「マンモス倒した後の男だよ！」
少女たち「あー！」
宮本「よし！歌え！オマエ！ everything！歌え！」

チッチ、おかしなメロディで everything を口ずさむ。

宮本「（明らかに嘘で）すげー上手いじゃん！」

突然ホンイキで everything を歌い出す亜弓。ボイパ的に参加しバックアップするバイク。

亜弓「あげないわよ。アンタになんかアタシをあげない！やさしい嘘さえついてあげないわ」
宮本「何でだ？！答えろ！顔か？包容力か？経済力か？家柄か？学歴か？答えろ！見ろ！俺を見ろ！見たか？見たな？見たか？三鷹！三鷹！」
亜弓「武蔵境」
宮本「え？」
亜弓「東小金井、武蔵小金井、国分寺、西国分寺、国立、立川、日野、豊田、八王子、西八王子、高尾！」

宮本「何でだ？！何故下る？！目指せよ！都を目指せよ！見ろ！俺を見ろ！見たか？見たな？見たか？三鷹！三鷹！」
亜弓「武蔵境」
宮本「畜生！！」
亜弓「方向性の不一致ね。（バイクに）行きましょ」
バイク「ブルンルンルンヴォンヴォンヴォンヴォンヴォン！」

一向に発進できないバイクと亜弓。

亜弓「大丈夫。平気よ。アタシ、細かいこと気にしない女よ」
バイク「ヴォン、ヴォンヴォン！」

バイク、立ち上がり、亜弓と共に歩き去る。バイクの下半身、取り残される。

宮本「畜生！マンモス仕留め損ねた！」
少女たち「パオーン…」
宮本「よし！俺よし！俺を見ろ俺！俺見て俺見て再度俺を見ろ！見た！見たか？見た！俺は俺を見た！見た！三田！三田！」
マヤ「泉岳寺！」
チッチ「高輪台！」
のりえ「五反田！」
謡子「戸越！」
マヤ「中延！」
チッチ「馬込！」
宮本「西馬込！、よし！都営浅草線！よし！停車！時間調整！告白タイム突入！」
少女たち「告白？告白？告白？」
宮本「えー、外人モデル並みのスタイル、パッチリ二重、艶やかな黒髪、高貴で華やかな仕草、正直俺にとっては高嶺の花ですが、マンモス仕留めに参ります！マヤちゃん、好きだ！」
マヤ「…え、私？！…」

動揺する一同。天皇陛下登場。

天皇「ちょっと待ったー！！」
一同「え？！」
天皇「三田駅を出発した浅草線に乗りそびれ、慌てて、公用車をぶっ飛ばしてチンは滑り込みセーフなり！」
一同「天皇陛下！」

荘厳な音楽。
レッドカーペットを敷きながらやってくる天皇陛下。

天皇「おいっす！本日は月に一度のお忍び庶民生活の日なんだよ！チンも人間だからね、あんまり浮世離れしすぎると宇宙人って言われちゃうからさ！何でもリモートやエスエヌエスで済んじゃう世の中だけど、チンは、直接対面しての対話をすごく重んじているとです！だってさ、例えば、『ごめんなさい』って文字だけ送られてきても、ニュアンスわからないとです！本気の謝罪の『ごめんなさい』なのか、不貞腐れての『ごめんなさい』なのか、ふざけた感じで『ごめんなさい』なのか、嫌味たっぷりの『ごめんなさい』なのか！わからないとです！あと、どうしたら開運できますか！そんなこんなでわからないことだらけとですから、本日はまず、

わからないことを少しでも解明するために、高島平のオジのところへ行ってきたとです！オジって言っても血縁関係はありませぬぞ！新宿の母、とか、銀座の母、とか、そういうやつ！はい！高島平のオジ！そう！占いです！すごい人気なんだよ！オジってところがいいよね！控えめだもんね！母ってさあ、ちょっと距離詰めてき過ぎじゃね？、って思うもんね！オマエ、チンの母じゃねーし！、とか思っちゃうもんね！その点、オジ、っていいよね。程よい距離感で、素直に言うこと聞けちゃうんだよな！母だとね、やっぱ反抗期とかもあるわけだし、うっせーなー！、とかなっちゃうよね！だから母はダメ！ナシ！オジ！あり！今日、まず高島平のオジに言われたこと！『先祖供養を大切に！』だってさ！すげー大変だよ！みんなは？、ちょっとお墓まいりに行けば済むと思うけど、チンの場合はね、わかる？、家系図２０００年以上前までガッツリ遡れるわけやから！伊勢神宮や出雲大社から始まって全国津々浦々！古墳！前方後円墳！わかる？前方後円墳！昔の貴族の家の鍵穴みたいな形したお墓！でっかいんだよ！1周したら2・7キロあったりすんの！そんなお墓がいっぱい！先祖供養、一生かかっても終わんねーよ！ね！開運って難しいよね！あとはね、高島平のオジが、引っ越せってさ！無理だバカヤロウ！いくらお忍びで行ってるとはいえ、住所言ってんだからピンとこいよって話！高島平のオジ、勘悪いよね！にこっ！でもさ、人間だもの！ね！チンはさ、いつもいつもお酒を飲みながら国民の幸せを願ってるんだ。ビール派？焼酎派？ワイン派？ノー！！庶民派！チンは庶民派だよ。庶民1人1人が平和で過ごせなかったら、世界の平和なんてありえないから。戦争反対！自分が殺されないように相手を殺すなんて、全くもってナンセンスだ！だから頭のいい人たち！頼むよ！その優れた頭脳を、人殺しの道具を開発するために使わないでください！今、我が国では幸福なことに戦争は起きていないけれど、いつどうなるかなんてわからないんだ。だから、みんな、ついうっかり忘れちゃいそうだけど、どんなに平和な気分の時だって、戦争はしないって思い続けてなきゃダメなんだよ。戦争をやりたそうにしている人がいたら、ダメだよ！（いってー！）、って言わなきゃいけないんだ！嗚呼！チンにもっと力があったらなあ！そういう意味で開運してーんだよ！解決することは難しいけど、解決できないこともあるんだってことを受け入れることが大切だよね！嗚呼！普段ゆっくり喋れってばっか言われてストレス溜まってっから、たまにこうやって超早口になっちゃうんだよ！酸素不足で真紫になっちゃってる唇の左右の端っこから泡吹いてチアノーゼ状態！気持ちいーー！あっぶねー！よし！というわけで、こうして庶民の告白集会にも滑り込みセーフで間に合ったってわけでした！」

全員拍手。

天皇「ありがとう！まだまだー！チンの報告は続くよ！あのね、あとね、今日は千円カットにも行ってきたよ！すごいね！カットする前に洗わないんだよ！カットしたあと、首回りについてる落ちた毛を掃除機みたいなので吸い込むんだ！首元を掃除機でブォンブォン吸われ、チンはゴミになった気分でした！『宜しくお願いします』から始まって、『ありがとうございました！』、まで10分くらいで終わるんだよ！すごいよ！すごい技術だよ！チンは、10分以内で誰かに差出せる技術なんて何もないから、本当にすごいと思った！そんな、何も取り柄のないチンですが、えー、外人モデル並みのスタイル、パッチリ二重、艶やかな黒髪、高貴で華やかな仕草、正直チンにとっては高嶺の花ですが、マヤちゃん、好きだ！マヤちゃん、チンの家系図にその名を刻みませぬか！」

マヤ「…え、私？！…」

動揺する一同。

マヤ「どうしよう…」

宮本「マヤちゃん！お願いします！」

天皇「マヤちゃん！お願いします！」

強風。音楽。

のりえ「何かがおかしい、そう思った」
謡子「たぶんだけど、普通だったら、このメンバーだったら、たぶんだけど、２人とも私を選ぶのが普通だと思う、そう思った」
チッチ「マヤちゃんを選ぶなら、私だってよくないですか？世界中のルールや常識が変わってしまったのかな、少なくとも、ノーブラで挑んだ私の努力は無駄だったな、そう思った」
のりえ「おかしい。外人モデル並みのスタイル、パッチリ二重、艶やかな黒髪、高貴で華やかな仕草、高嶺の花。恋は盲目とはいうけれど、流石に１つもマヤちゃんに当てはまらない。優しい嘘の領域を超えすぎていると思う。これ、屈辱的だよ。かわいそうなマヤちゃん。こうなると、逆に告白されていない私は、可哀想ではない。だって、お母さんのような癒し、とか、民族の歴史を感じさせる古風な顔立ち、とか、そういうこと言われたら敵わないって納得できるけど。酷すぎる。屈辱的だよ。かわいそうなマヤちゃん。私は、可哀想ではない。もしかして、これは世紀末かもしれない、そう思った」

強風。音楽。ゾンビメイクの男（速水）、フラフラと登場。

一同「速水クン！！」
速水「…おっす」
マヤ「どうしたの？」
チッチ「酷い顔してフラフラじゃない！」
宮本「告白タイムは終了したんだ！遅刻者に渡すマンモスはいないぞ！」
天皇「何かあったのか？高島平のオジを紹介しようか？」
のりえ「何か、ゾンビみたい！」
謡子「本当！ゾンビみたい！」
チッチ「速水クン、ゾンビになっちゃったの？」
のりえ「遂に世紀末がきたのかもしれない！」
マヤ「速水クン、ゾンビの、役なの？」
速水「え？？」
マヤ「だから…速水クン、ゾンビの、役なの？」
速水「ゾンビの役？？は？おい！見縊らないでくれよ！もし、俺がゾンビの役をやるとしても、こんなわかりやすいゾンビメイクは絶対やらねー！気持ちで、気持ちでゾンビを演じてみせっから！わかりやすいゾンビメイクなんてしなくたって、俺ならゾンビを演じられるから！」
マヤ「ごめん…」
のりえ「なるほどね…気持ちで演じる、なるほどね。つまりマヤちゃんは、大人しそうで人の良さそうな地味な外見をしながら、外人モデル並みのスタイル、パッチリ二重、艶やかな黒髪、高貴で華やかな仕草、そんな女を気持ちで演じてたってわけか。そして男子たちはそんなマヤちゃんに惚れた、そんなマヤちゃんの演技に惚れたってわけか。やられたわ。私が甘かった。こんな女たちに余裕で勝てると思ってた私が甘かった！地味な女、ノーブラだけが取り柄のアホみたいな女、若さだけが取り柄のアホみたいな女、そう信じ込んでた！恥ずかしい！私の測量、甘かったわ！マヤちゃんに降りかかっているように見えた屈辱の魔の手は私の前髪を捉えていたなんて！」
チッチ「でも速水くん、ゾンビみたいになってることは確かよ！」
謡子「どうしたの？」
速水「戦場に行くんだ」
マヤ「戦場？！」
速水「ああ。ブラック企業のオフィスという戦場にね」

のりえ「ブラック企業のオフィスという戦場？！」
速水「もう入社して3日目なんだ」
マヤ「3日でこんな状態になるなんて」
宮本「相当ブラックだな」
速水「ああ。ブラックもブラック。ブラックブラックだ（クチャクチャ）。朝は9時に出社、これは絶対。仕事が終わって帰宅するともう18時さ。まともに陽の光を浴びる時間なんて微塵もないんだ。いや、休憩時間の1時間だけだな、オフィスのテラスのハンモックで束の間の日光浴できるのは。出社のシフトは月水金土！土曜も出勤なんだよ！そりゃゾンビみたいになっちまうよな。オフィスではユニマットのコーヒーはタダで飲み放題、だからすごい飲んじまう。ヤベーよ。なだ万が完全監修してる社員食堂も無料で食べ放題。すげー食っちゃうんだよ。自分がこんなに食べる人間だとはな。驚いたよ。今は丁寧な研修中だけど、ゆくゆくはお得意さんの顧客名簿に連絡して、ひたすら契約取りまくる。契約とってもとらなくても固定給45万円。地獄だよ。モチベーションあがんねーよ。やべーんだ。ただ、興味本位でさ、働かないといけないんだ、どんなブラック企業であっても！ブラックブラック！ペッ！」
マヤ「速水くん…」
チッチ「大丈夫？今もう、16時だよ」
速水「ああ。初めての遅刻だ。どんな刑罰が待ってるかと思うと、足取りが重くなっちまう」
天皇「刑罰！？」
速水「うん。遅刻した人間は、遅刻したことがバレないように何食わぬ顔で、まるで朝から出社していたかのように振舞わなきゃならないという規則、規則というより、罰則だよ。謝らせてくれたらどんなに楽なことか！誰も責めてこないんだ！」
天皇「酷いな…高島平のオジでも手の打ちようがなさそうだな」
宮本「ブラックすぎる…じゃあ、もう部活には来れないのか？間も無く試合だってのに！」
速水「わからない。会社に掛け合ってみるよ。たぶん、大丈夫だと思う。しかし、ゾンビのように見えちまってる俺が、どれだけ活躍できるかはわからないけどな」
宮本「そんな…」
速水「じゃあ、ごめん。そろそろ、オフィスという戦場、戦地に行くとするよ」
チッチ「（ノーブラをブラブラさせて）速水くん！」
速水「（体をアップダウンさせながら）生きて帰ってこれるといいな」
マヤ「ううっ！！（おさげを片方、引き千切って渡して）これ…持ってって。お守り」
速水「ありがとう」
のりえ「なんと！女の命とも言われる髪を！惜しげも無く！こういうとこね！負けない！ううっ！（おさげを両方、引き千切って渡して）これ…持ってって。お守り」
速水「え…」
のりえ「よし！一本より二本！とりあえず質より量！」
速水「…持てるかな…ありがとう」
のりえ「…あ…」
マヤ「のりえ、可愛いよ！ベリーショート、似合ってる！」

音楽。

のりえ「え？…あ、りがとう…なんか、え、上から目線？マヤちゃん、慰めて、くれてるの？気使ってる？なんか、すみません…え、何この敗北感…何で？湧き上がる、恨みます！、という気持ち！待って待って！あれ？私が二本のおさげを差し出したから、マヤちゃん悔しいのかな？うん！きっとそう！じゃ、恨まない！」
速水「じゃあ。また（敬礼）」
謡子「♪（突然民謡を歌う）」

一同、シクシク泣く。

チッチ「悲しく辛いこの別れの場面に、元気のいい民謡！泣けてきちゃう！」
一同「ううう～」
のりえ「は？本当に？全く理解できない感情の機微と情操作用！私だったら、北ウイングとか歌うのに！みんな気使ってるの？（謡子のことを）この女はバカ！」

音楽。

速水「では！行ってまいります！！あ、そうだ忘れてた、こんな俺じゃ絶対手が届かないのはわかってるけどダメ元で一応、マヤちゃん、好き」
マヤ「え…」
のりえ「えーー！私のオサゲ無駄ーーー！！」
マヤ「待って！！」
のりえ「今度は何？！」

マヤ、見えないナイフで速水を刺す。
強風。音楽。血をモチーフにした赤い紐が大量に振り落とされる。

速水「うぐわあっ！なんじゃこりゃーーー！！」
一同「キャーーー！」
マヤ「刺しました。私は速水くんを、見えないナイフで刺しました。速水くんを戦場に行かせたくないからです。人間は、戦場に行ってはいけない。戦争をしてはいけないのです。だから私は、ナイフで、見えないナイフで速水くんを殺した。戦争に行かせたくないから。戦争に行って、殺したり殺されたりして欲しくないから。わかりますか？戦争というのは、戦地でだけでなく、戦地以外でもこうした悲しい殺人を起こしてしまうのです。愛する人を戦地に行かせないための殺人。私は殺人者。悲劇。これは悲劇。それならそれでいいじゃないか。私は、速水くんを殺し、これから逃亡生活を強いられるであろう私、この世の闇でひっそりと息を潜め死んだように生きていかねばならない私、つまり自分自身という存在も殺したのです！私は、２人の人間を殺してしまった！悲劇。これはＷの悲劇。いえ、待ってください。殺したのは２人だけではないわ。天皇陛下の登場によって、私は、これは鴻上尚史先生の作品、『トランス』が始まったのだということをいち早く察した。だって、私が知る限り、天皇がカジュアルに登場するお芝居はトランスだけだから！トランスの登場人物は３人。３人芝居です。天皇陛下と言い張る男と、その学友である女精神科医、そして、もう１人の学友であるゲイバー勤めの男。つまり、女である私が演じられる役は１つだけ。そう、私は精神科医。そう思った瞬間、私は、一緒にいる３人の女たちを、心の中で殺したのです。つまり私は、速水くんと私、そして友人である３人の女、合計５人を殺したのです！ＷＷ＋１、の悲劇！」
一同「マヤちゃん…」
のりえ「恐ろしい子…。バカみたい、私！一本より二本！、とりあえず質より量！、そんな浅はかな比べ方で、オサゲを二本差し出して優越感に浸ってた私！知らぬ間に殺されてただなんて！」
天皇「なんということだ…殺人者になったマヤちゃんをチンは諦められるのか、られない！」
宮本「俺だって！」
速水「俺だって…」
のりえ「此の期に及んでみんなマヤちゃんが好き！殺人者じゃない私のことより、殺人者であるマヤちゃんが好き！ギャー！デスノートください！！」
速水「俺は、生きてるのか？死んでいるのか？！はてな！」

バイクと亜弓、登場。

バイク「ブルンルンルンヴォンヴォンヴォンヴォン！」
亜弓「逃亡には盗んだバイクがよく似合う。ねえヴァイク」
バイク「yeah！」
マヤ「え？」
亜弓「ご周知の通り尾崎豊さんだって堂々とそう歌い上げてる。福田和子だって盗んだヴァイセコーで逃げのびた。アタシも、愛したヘリを殺してこのヴァイクと愛の逃避行中。ね？その気なら、アタシからこのヴァイクを盗んで逃亡してごらんよ！」
マヤ「でも、アナタのバイクでしょ？」
亜弓「誰のもの、なんてある？どちらがこのヴァイクに相応しいか、それを決めるのはヴァイク本人よ。とりあえず乗ったら？もしアナタがいつかそうしたくなったら、その時盗めばいいんじゃない？、ヴァイクのハートを。アタシ、平穏な恋愛より、例えズタボロになったとしても、波乱万丈な恋愛が好き。人間力上がるから。悲しい歌を悲しく歌うことは誰でもできるけど、悲しい歌を楽しげに歌うことは、本当に悲しい経験をした人間にしかできないからね。想像は経験をこえられないよ！」
マヤ「想像は経験を超えられない…」
亜弓「決着つけるのはあとでいい。違う？」
マヤ「…乗るわ！」
一同「マヤちゃん…！」
のりえ「ずるいずるいずるい！殺人者が見知らぬ女とバイクで格好良く逃亡！オーバードラマチック！私は？無駄にオサゲ2本引き千切っただけ！ドラマなし！」
亜弓「ねえヴァイク。恋敵になるかもしれない女をアンタに乗せるなんて、アタシってつくづく、言うことやる事なす事、格好良すぎない？」
バイク「yeah！」
マヤ「（バイクに跨って）お邪魔します！」
亜弓「しっかり捕まって！涙の谷超えて、行くよ！」
バイク「ブルンルンルンヴォンヴォンヴォンヴォン！」

発車できないバイク。

亜弓「アタシ、細かいこと気にしないオンナだけど、ここは、できれば2人乗りして颯爽と走り去りたいよね、できればね」
バイク「yeah！ブルンルンルンヴォンヴォンヴォンヴォン…」
マヤ「ごめんなさい、私が、重いから…」
バイク「いえ、そうじゃなくて、あの、砂が、ね、砂が、ズルズル滑っちゃうし、四つん這いになってる手の平や膝にチクチク痛いんですわ」
一同「あー！」
天皇「嗚呼！…国がバラバラになってしまう、民衆の思いがあちこちに四方八方に離れ離れに浮遊してしまう、そんな時、バイクの発言で民衆の思いが一つになったのだ！！」

全員で合唱、途中から歌いながら全力で砂の片付け開始。

♪M2『片付けの歌』（詞：澤田育子　曲：中村中）

儚い砂の城探して　迷子になってみたいけれど
砂の上で演じることを本気で望む奴はいない（いない）

砂に足取られ（フラフラ）　立っているだけで（フラフラ）
奪われる体力　見た目以上
靴に入り込んで（チクチク）　足の裏を刺す（チクチク）
砂の上に四つん這いバイク　この痛み苦痛　伝えきれない

だから、もう砂を片付けよう
一粒残らず砂片付けよう
他のことは何も気にせず
ただやるだけ　片付けるだけ　やるだけ
オシッ！

（間奏中）
長井（N）「オシッ…じゃねえよ…民衆の思いが1つになった？だとしたら、1人を除いた民衆の思い、だね。私を除いた民衆の思い、だね。確かに砂は邪魔だし厄介、それは私も思いました。だから合唱にも加わったし片付けもした。でも、それ以上に！バイクの下半身として登場したものの、なんとなくタイミングをつかめず、そのまま居続けてしまい、その後なんの脚光も浴びていない私なのです」

お金をかけて（セカセカ）　知恵を絞って（セカセカ）
準備した夢の砂なんだけど
城も作れない（シクシク）　嵐も起こせない（シクシク）
微妙な量しかない悲しさ　この痛み苦痛伝えきれない

だから、さあもう砂を片付けよう
一粒残らず砂片付けよう
他のことは何も気にせず
ただやるだけ　片付けるだけ　やるだけ
ただやるだけ　片付けるだけ　やるだけ
オシッ！

全員「オシッ！！」

全員意気揚々と去っていく。1人残されたバイクの下半身（長井）。いち早く気付いたのりえが踵を返し、こっそり盗み見している。

長井「みんな満足そうに去って行った。うまく言えないけれど、おかしいと思います。こんな世界、おかしいと思う。何も言えないけれどおかしいと思ってる人間がいることを誰も気付いてはくれないのです。だから、私は声をあげようと思います。私は、この国を変えようと思います！」

長井退場。

のりえ「ずるいね。いくら活躍できない時間を過ごしていたからって、いきなり一人、抜け駆けで決意表明だなんて、ずるいね！ずるい！この国を変えるだって？ふん！私だって負けない！私は、国が変わるのを待ってなんていない！国が変わる前に、私が変わる！比べてばかりいる女であるこの私を！変える！疲れたから！比べてばかりで浮かれたり落ち込んだりの繰り返しで疲れたから！測量士は重労働！あの子が国を変えるのが先か、私が私を変えるのが先か！私が先！嗚呼、また比べちゃった！」

激しい波音と強風の中、のりえ退場。

【3・テレフォンラブ】

激しい波音と強風。客席内で巨大送風機を回し換気。プロレス的な派手な登場曲とサーチ的ライト。升の付いた番傘を回し登場する電話男（電田）。受話器が保留状態になっている。般若の面を着けた北斗晶の装いの女（風子）が刀を持って登場。ポーズを決めるたびにビュビュンと風が切られ、突風が吹く（換気）。般若の面と衣装を脱ぐと、芝生スーツに芝生ブーツ姿の風子、受話器を取る。

風子「ああ、ごめんなさい。お待たせしました。え？ビュンビュンうるさかった？あ、聞こえちゃってた？あー、ごめんなさい、ちょっと、ね、あのー、風を、切ってたの。刀で風を切ってたの、北斗晶さん気分で。空気入れ替えておりました。大事でしょ、そういうの。まぁ、うるさかったのね、ごめんなさい。保留音機能がないのよ。保留音機能。本当はねえ、お待たせしながらオリビアニュートンジョンとかかけたいんだけど。『そよ風の誘惑』とか。知らない？絶対知ってるわよ。（鼻歌でメロディを説明）、え、知らない？ほら、コールセンターとかに電話して待たされてる時によくかかるじゃない？言い方優しくね、イライラしないでよ、そのクレーム本当に今言うべきなの？、みたいなメッセージが込められてる曲よ。え、知らない？絶対知ってるわよ！」

風子、アカペラで『そよ風の誘惑』を和訳と共に歌い始める。途中から電田も参加し、保留音メロディ＆和訳（電話を待たせている側）＆（電話で待たされてる側の）意見、を交錯させながらバトルのように2人で歌う。

風子「あ、もういい？え、知ってた？ほら！でしょ？え、じゃあ、早く言ってよ。フルで歌って疲れちゃったわよ、だからこの曲、人待たせてる時にかけたら逆効果ってこと！英語わかんないと思って舐めてんのよ！わかるっつーの！意味わかって余計イライラするってのよねぇ。え？うん、そう。あ？だから、風を切ってたんだって。え、セクシーゾーン？『風をきって』って歌があるの？知らなーい！そんなのに影響されてないわよ！知らないもん、セクシーゾーン。1人も名前も顔も知らないし、何人いるのかも知らないわよ！うん、うん、そうね、私もさ、小学生の時チェッカーズ大好きで。え？もちろんフミヤ君よー。でね、母親がさあ、7人いるチェッカーズのメンバー、全員同じ顔に見えるって言うから、私、ビックリして、ウチの母親病気なんだって子供ながらに心配になったわよ。そうそう。今じゃ私も同じ病気よね～。あーあ、どうでもいい話って楽しいけど、とにかく来週契約って件は了解です。商店街の中だし1階だし、いい物件あって良かったわよね。いいわよ、家賃発生はそれからで。社長にも話通してあるから。うん、はい、じゃ、よろしくお願いしまーす」

風子、受話器を置いて電話を切る。

電田「チーン」
風子「ふう」
電田「30秒で済む要件に6分かかった」
風子「え？あ、ごめんなさい」
電田「いや、そういうの、いいなって」
風子「え？」
電田「要件だけ端的に済ませたいならメールでいいわけだから。電話ならでは、ってこと」
風子「まあそうね。電話だとつい余計なこと喋っちゃう。それが、いいよね」
電田「うん。それが…いい」
風子「…」
電田「藤井フミヤ、好きなの？」

風子「好きだった」
電田「へー。凄い好きだった？」
風子「凄い好きだった」
電田「俺、藤井フミヤに似てる？」
風子「全然。どちらかというと鹿賀丈史さんに似てる」
電田「だから？」
風子「だから？？」
電田「生憎、鹿賀丈史さんに特化した情報は特に持ち得てないから、藤井フミヤの話題に戻すけど、アイツ、すげー洒落た高い椅子とかいっぱい集めてんだろ？」
風子「そうみたいね」
電田「どう思う？」
風子「え？」
電田「そういう男。どう思う？」
風子「どうって？」
電田「だから、すげー洒落た高い椅子とかいっぱい集めてる男」
風子「…」
電田「俺は、俺だったら、俺のケツは1つだから、すげー気に入った椅子1個でいいな、って思う」
風子「…広いんじゃない？金持ちだから、部屋が」
電田「すげー広い部屋でも、俺だったら、俺のケツは1つだから、すげー気に入った椅子1個でいいな、って思う」
風子「あ、うん、そうね」
電田「（唐突に元気をなくす）」
風子「…え？」
電田「…」
風子「どしたの？」
電田「俺、自分の意見を強めに押し付けちゃうとこあんだよ。社長にもさっき怒られた。今、無理やり『うん、そうね』って言わせちゃったよね」
風子「そんなことない」
電田「本当に？」
風子「本当に」
電田「本当に、椅子は1個でいいって思った？」
風子「思った」
電田「本当に？」
風子「私が、ノーと言えない日本人に見える？ノーと言えない日本人が言う『イエス』は全く信用できないけど、私が、ノーと言えない日本人に見える？」
電田「（女の全身を凝視）見えないね」
風子「この夏、意外にも一番売れた商品、知ってる？」
電田「あれだろ？手で持って持ち歩く小さい扇風機」
風子「ブー。人工芝」
電田「人工芝？」
風子「人工芝。バカ売れ。ですって。御多分に洩れず私も爆買いしてテラスに敷き詰め、余った分でスーツとブーツを誂えました」
電田「へー」
風子「人間はグリーンを欲しいてるのね」
電田「俺も、久しくゴルフ行ってないからなあ。（ゴルフクラブを手に素振りして）去年はみんなでよく行ったのにね」
風子「そういうご時世よ」

電田「ゴルフ行きてぇなあ」
風子「行く？」
電田「え？」
風子「ゴルフはゴルフ場でしかできない。そんな考えって負けよね。みんな負けたくないでしょ？だから人工芝が売れる」
電田「？」
風子「プレイボール！」

風子、床に大の字に寝転び股間部分にフラッグを立てる。

電田「ワオッ！久々のゴルフに腕がなります！プレイボーイのプレイボールだぜ！」
風子「え？」
電田「よしっ！（球を打って女の股間にホールインワンさせる）」
風子「キャッ！カランカランカラン…スコーン！」
電田「ホールインワン！…いろんな意味で」
風子「オジサンみたいなこと言うのね」
電田「俺、オジサンだぜ」
風子「そうね」
電田「（芝生に横たわり）年下のオジサン、どう？」
風子「年下の男、ってよりは、プレッシャーないわね」
電田「だろ？」
風子「年下のオジサンと年上のオバサンかあ。ねえ、私股間からゴルフボール出したら、ウミガメみたいね」
電田「ウミガメの出産は、有無を言わせず感動させるよね。別に自分が可愛がってたウミガメでもなんでもないのに。自然ってすごいよね。（芝生の寝心地や肌触りを存分に確かめて）……あ～、こうやっていると、少年時代を思い出すなあ」
風子「井上陽水？」
電田「違うよ。まあ、でも夏、だね。芝生にゴロンって、ね」
風子「うふふ」
電田「ねえ、ホールインワンの記念品は何？かな？」
風子「そうね、どうしようかな」
電田「おっと！（立ち上がって）ジリリリリ！ジリリリリ！」
風子「あん！（慌てて起き上がり受話器を取って）お電話ありがとう、」
電田「ツーツー」

電田、風子にキスしようとする。既のところでガードする風子。

風子「嘘つきね。そういう記念品のご用意はないわ」
電田「悪戯電話さ。（女の異常に突起している乳首を凝視して）じゃあ、その異常に突起してるトロフィーをいただこうかな」
風子「これ？」
電田「うん」
風子「…いいわ（脱ごうとして）」
電田「ふふぁっ！！」
風子「洋服は、脱ぐために着てる」
電田「じゃ、何のために脱ぐのかな？俺のため？」
風子「着るため。着て、またすぐ脱ぐため」
電田「洋服って面倒臭いね」

風子「そう？和服の方がもっと面倒臭いわ」
電田「そういうことじゃなくて」
風子「え、すれ違い？」
電田「人間だからね。こちらが差し出すものと相手が求めるものは、必ずしも一致するわけじゃないよ。限界はある」
風子「だから、すれ違いってこと？あ、性の不一致のこと？」
電田「うーん、でもまあ、そこをどう乗り越えるかが醍醐味だよね。脳天ぶち抜くような恋をさせてあげるよ、ってこと」
風子「あげる？あげていいのは唐揚げだけって聞いたことあるけど」
電田「ごめん、もとい、脳天ぶち抜くような恋をしようぜ」
風子「年下のオジサンらしい発言」
電田「俺、オジサンだぜ。さっきの話。ずっと着たままだったり、脱いだままだったら楽だけど色気ないよね」
風子「そうよ。蟹工船だわ」
電田「蟹工船？」
風子「小林多喜二。まさしく着の身着のまま。木の実ナナ。恐ろしい船よ。絶対に乗りたくない」
電田「…うん。蟹工船には乗らせないよ」
風子「蟹は好きよ。大好き」
電田「俺、蟹に似てる？」
風子「全然。藤井フミヤよりは蟹に似てるけどどちらかというと鹿賀丈史さんに似てる」
電田「…そろそろトロフィー、くれないかな」
風子「ウップス！」

風子、徐に、乳首部分に手を入れ、突起物を取り出す。巨大なシャインマスカット。

風子「はい。ジャンボシャインマスカット」
電田「（受け取って）いいね。ホールインワンの記念品だけあってジャンボだね。ジャンボ尾崎（食べる）」
風子「気に入った？」
電田「ああ（女の全身を舐めるように見つめる）美味い。ジャンボ尾崎はゴルフが上手いぜ」
風子「オジサンみたいなことばかり言うのね」
電田「だから俺、オジサンだぜ（女の肉体を凝視）」
風子「（凝視されてることを存分に意識して）…内見、希望？」
電田「いや。即契約、かな」
風子「内見なしで？」
電田「なしで」
風子「間取りさえ、知らずに？」
電田「関係ないね」
風子「４・５畳、４・５畳、３畳、全室和室の収納ゼロ、最悪に使い勝手の悪い３ＤＫかもよ？しかもバストイレ一緒」
電田「関係ないね」
風子「柴田恭兵」
電田「築年数さえわかれば、あとは直感。それが一番大事」
風子「大事ＭＡＮブラザーズ」
電田「正解。築年数に間違いナシ」
風子「事故物件かもよ？」

電田「過去の事故なんて関係ないね。俺、ＤＩＹ得意。それに、恋愛の始まりなんていつも事故みたいなもんだろ？」

電田、風子にキスしようとする。既のところでガードする風子。

風子「ちょっと！まだ契約してないわ」
電田「ジリリリリ！ジリリリリ！」
風子「また悪戯電話？」
電田「ジリリリリ！出てみないとわからないよ。ジリリリリ！」
風子「いやよ」
電田「５、４、３、」

風子、受話器を取ろうとするも、電田、先に受話器を取り、瞬時にコードで風子を緊縛的にグルグル巻きにする。

風子「ヒャッ！」
電田「（受話器に）電話の音よりカウントダウンに弱いんだ？」
風子「日本人だからね。割とみんなそう育てられてるんじゃない？『早く片付けなさい！じゃないと全部捨てるわよ！ほら、５、４、３、』」
電田「２！１！…テレフォンセッ○ス、したことある？」
風子「え？！」
電田「これが、初めて？」
風子「…初めてよ」

密着し見つめ合う電田と風子。

風子「え、テレフォンセッ○ス、ってこういうことだっけ？？」
電田「俺、電話。テレフォン」
風子「ややこしいわね」
電田「ややこしい男、嫌い？」

２人、キスをする。竹刀片手に肩幅の広すぎる監督登場。

監督「（大声で）すみません！」
電話・風子「あっ！」
電田「屈辱的だネ」
風子「全てが、ね」
電田「でも」
風子「ただやるだけ、だから」
電田「だね」
監督「オマエ、何やってんだよ！時間！始まる！部活！」
電田「わわ！すみません！」

【4・水泳部】

水着姿の水泳部員達がやってくる。人工芝を敷く部員たち（速水、小野寺、宮本、のりお）。慌てて着替える電田。

監督「集合！」
部員たち「はいっ！」
監督「いいか！試合までもう時間ないぞ！集中しろ！いないだろうな！恋愛なんぞに現を抜かしてる奴は！いないだろうな！」
部員たち「…いません！」
監督「（クンクン嗅いで）匂うな。正直に手を挙げろ、ここ2、3日の間、女とキスした奴、手を挙げろ！」
部員たち「？！」

様子を伺う一同。緊張。水の出る竹刀で威嚇する監督。

監督「バレてんぞ！バレてんだ！犯罪と同じ！自主した方が、」
小野寺「（手を挙げて）すみません！今朝家を出る際に『いってらっしゃい』と見送ってくれた母と！すみません！どんな刑罰も粛々と受け止める所存であります！」
監督「聞く！そこにどんな愛があった？」
小野寺「純粋に、親子としての愛のみであります！」
監督「水泳で言うと？」
小野寺「えー、（水泳的な何らかの泳法の動きに合わせて動きながら）『いってきます！』『いってらっしゃい！』ハグ！キス！あ！平泳ぎです！」
監督「合格！無罪！」
小野寺「ありがとうございます！」
速水「すみません！昨日、スナックで、ホステスさんにねだられて渋々ボトルを入れたら、ありがとうって不意打ちでキスされました！すみません！」
監督「聞く！そこにどんな愛があった？」
速水「純粋に感謝、という愛だと思います！」
監督「水泳で言うと？」
速水「えー、（水泳的な何らかの泳法の動きに合わせて動きながら）『ボトル入れてよ～』『しょうがないなーじゃ、焼酎ボトル1本！』『ありがとう！』キス！あ！クロールであります！」
監督「合格！無罪！」
速水「ありがとうございます！」
宮本「すみません！これは自首すべきことではないのかもしれませんが！鏡を見てたらあまりに美しい自分の顔に見惚れ格好いいしある意味クールな女にも見えなくもねぇななんて思って思わずキスをしてしまいました！」
監督「聞く！そこにどんな愛があった？」
宮本「自己愛です！」
監督「水泳で言うと？」
宮本「（背泳ぎの動きに合わせて動きながら）『格好いいな』『俺やっぱ格好いいな』『クール！』キス！あ！背泳ぎです！」
監督「合格！無罪！」
宮本「ありがとうございます！」
のりお「自分は！断じてキスなどしておりません！真の男として！、生きる覚悟を決めた自分！キスなどしたら、ああ、あの子とのキスの方が良かったな、とか、こいつ俺とキスしなが

ら他の男のこと思い出してねえか？危うくそんな測量的比較が頭を巡り、一体何のために男としての、」
監督「もういい！水泳で言うと？」
のりお「えー、（犬かきの動きに合わせて動きながら）集中集中集中！あ！犬かきであります！」
監督「合格！無罪！」
のりお「ありがとうございます！」
監督「最後！オマエ！」
電田「あのー、わかりにくいかも知れませんが、自分は、電話という役割も担っており、電話であるから故、他人の口元が、非常に近い位置に来る訳です。わかります？電話！監督も、電話を掛ける際、こうして、電話を口に触れるか触れないかの位置にしますよね？ですので！全く！全く意識はございませんが、無意識に！言うなれば事故的に！もしかしたら！もしかしたら知らず知らずのうちにキス？、という名の接触を！形ばかりの接触をしてしまっていたかも知れません！」
監督「聞く！そこにどんな愛があった？」
電田「愛は…ないです…あるのは…屈辱だけ、屈辱だけのキスです…」
監督「水泳でいうと？」
電田「…泳いではいませんでした」
監督「水泳でいうと！」
電田「強いて言うなら…立ち泳ぎです」
監督「…立って（勃って）たのか」
電田「はい」
監督「立って（勃って）たんだな」
電田「はい…！あの、あくまで水泳で言うと立ち泳ぎ、ということで、」
監督「屈辱だけのキスをしながら、立って（勃って）たんだな！！！」
電田「はい！！！」
監督「いいか！！オマエらが自由になれるのは水の中だけだ！忘れるな！水の中で一番自由なのは何だ！」
部員たち「…！魚です！、」
監督「カエルだ！魚は、陸に上がったら死ぬ！即死！考えろ！死にてぇのか！」
部員たち「死にたくありません！」
監督「カエル目指せ！」
部員たち「はい！」
監督「ゲロゲロゲロ！」
部員たち「ゲロゲロゲロ！」
監督「（カエル的動きと音階とリズムつけて）ゲロゲロゲロ！」
部員たち「（監督の真似して）ゲロゲロゲロ！」
監督「（カエル的動きと音階とリズムつけて）ゲロゲロゲロ！」
部員たち「（監督の真似して）ゲロゲロゲロ！」
監督「誰だ！違う奴いたな？カエルじゃねー奴いたな！！」
小野寺「すみません、カエルに対して浅はかな知識しか持ち得ていませんでした！」
監督「生物部！」

生物部の女子（謡子・チッチ・かめこ）登場。カエル跳びを披露しながらカエルの生体の説明。

生物部「生物部参上！」
謡子「蛙は両生網無尾目に分類され南極大陸を除いた全大陸および島嶼に６５７９種が生息」

チッチ「陸と水中で生活し、ほぼ肉食であり舌を伸ばし昆虫などをそこにくっつけて口に引っ張り込む」
かめこ「海水に入ると死んでしまう」
謡子「食用としても有名であるが、生食は危険である」
かめこ「繁殖期にオスがメスを呼び産卵を促すために鳴く」
チッチ「オスが、他のオスにメスと間違われて抱接された時、つまり、体を密着させ生殖器を近付けられた時、間違えてるよ、間違えるなよ、という接触の解除を要求して鳴く」
かめこ「蛙に因んだ諺や言い伝え、縁起物としてのお金がカエル、流行語としてのカエルコールなどがある」
監督「ＯＫ！ありがとう！」

監督、生物部の３人にキスをする。

生物部「キャーッ！」

生物部退場。

部員たち「！！え…？！」
監督「カエルだよ！カエルとしてカエルにキスしただけ！」
部員たち「…あ…」
監督「オマエら何だ！何なんだ！」
部員たち「…カエルです！」
監督「合格！全員カエルになったところで、プール準備！」
部員たち「はいっ！１、２、３、４、５、６、７、８！」

ピラミットを作る部員たち。頂点に登り腹ばいになる監督。

監督「入水！テイクユアマーク！ゴー！」

泳ぎだす監督。耐える部員たち。

監督「良く見ろ！俺の泳ぎ。カエルの平泳ぎ！二度と見本見せねーぞ！」
速水「すみません監督！（体制的に）ちょっと、見えないです！」
監督「見上げろ！」
部員たち「見上げられないです！」
監督「オマエら、カエルだろ？カエルの視界は３３０度だ！見上げることができないなんて、豚だな。豚の肉体は構造上、空を見上げることが出来ないように作られてる。（この辺りから徐々に亜弓と交錯しながら）でもね、豚だって空が見たいから。飛行機乗り回すんだ。飛行機乗り回して空を旅して、飛行機に恋をする」

音楽。監督が亜弓へと移行していく。

監督／亜弓「恋を知ったら、より見えてくるものと、知らぬ間に見えなくなるものがあるのね。もはや私は豚ではなかった。私は、より多くを見たいと望んだ。空の果てから海の底まで。水中という無音の中で微かに聞こえる声に心を傾けてみたかった。私の声。そう、私は変わりたかった。私は変わる、自分で自分を、私は変える（カエル）。姿を変える（カエル）。気持ちは変わる。いつか変わる。変わるの待つなら自分で変える（カエル）。いつだって七変化。ルールは常に自分次第！」

部員たち「（正面向きのまま）見えます！監督の平泳ぎが、はっきりと！…監督の泳ぎながらのお喋りは、僕らには『ゲロゲロ』としか聞こえてこず、まるで本物のカエルのようだった」

アナウンス音。

アナウンス「まもなく、男子平泳ぎ１００メートルの部、開始となります。出場選手は集合してください」
監督「スタンバイ！」
部員たち「はいっ！」
監督「DO YOUR BEST！JUST DO IT！」

ファンファーレ。

アナウンス「選手入場！」

アタック音。同時に、客席頭上に吊るされて飛び跳ねる大量のカエル。カエルの鳴き声。

監督「見ろ！世界屈指の選手たちが大集合だ！」
部員たち「DO YOUR BEST！JUST DO IT！」
アナウンス「テイクユアマーク！」

スタートの体制をとる部員たち。
スタート音。音楽。

♪M3『DO YOUR BEST！& JUST DO IT！』（詞：澤田育子　曲：中村中）

swimming！swimming！　踊るように泳いでいけ
DO YOUR BEST！& JUST DO IT！
やるしかないかラララララ！

come on come on 喝！L！（カエル）　L サイズの喝ください（喝）
come on come on カツ！L！（カエル）　L サイズのカツ食べるぜ
気分次第　飛び跳ねても　君の元へ　カエルから
オタマジャクシ　そっと見せてあげる（Hang in Hang in there！）
やるしかないか！
swimming！swimming！　踊るように泳いでいけ　そうさ
swinging！swinging！　泳ぎもダンスも得意じゃないけど
swimming！swimming！　踊りながら泳いでいけ
DO YOUR BEST！& JUST DO IT！
やるしかないかラララララ！

come on come on dancing（男子！）　aquarium で rhythm and (blues)
come on come on dancing（男子！）　水の中の dance hall！
キスしたいね　長い舌で　ハグしたいね　粘るこの手で
粘着力　君に見せてあげる（jumping jumping flush！）
やるしかないか！（DO YOOUR DOYOUR BEST）
やるしかないか！
swimming！swimming！　踊るように泳いでいけ　そうさ

swinging! swinging!　君のために行くよ
I can't　stop thinking about you
swimming!-swimming!　踊りながら泳いでいくよ
DO YOUR BEST !& JUST DO IT !
やるしかないか!

二度と君に(swimming swimming)
逢えないなんてムリ(swinging swinging)
格好悪い(swimming swimming)
振られ方はお断り　I can't stop thinking about you!
お母さんに(swimming swimming)
会いたいな（swinging swinging)
DO YOUR BEST !& JUST DO IT !
やるしかないかラララララ!

試合終了を告げる発砲音。ゼーハーしている部員たち。

監督「良くやった!!」

演劇部員（マヤ）が、衣装を持ってやってくる。

マヤ「試合でクタクタなとこゴメン!演劇部の発表会、明日だってのに主役の男子が倒れちゃって。急なんだけど、誰か、代わりに出てくれない?」
部員たち「（口々に）は?嫌だよ／演劇?は?／俺カエルだしなー」
小野寺「カエルの役ならやってやるけど!な!」
部員たち「（口々に）アハハハ!」
マヤ「カエルの役ではないけど…お願い!あのー、主役ね、そんなにセリフはないんだけど、ヒロインと…キスシーンあって、」
部員「（口々に）!やるよ!／しょうがねぇなー!」

部員たち、争うように走って退場。取り残されるマヤ。と、監督（亜弓）。

マヤ「ヒロイン…私だよ…」

【5・勝負】

項垂れるマヤ。監督はいつの間にか完全に亜弓の装い。マヤも、持参した衣装を着用し、時代経過。

亜弓「ヴァイク…」
マヤ「え…」
亜弓「ごめん。癖。来ないことはわかってる」
マヤ「！！まさか、まだバイクを待ってるなんて」
亜弓「待っては、いないわ」
マヤ「バイクを奪った私を恨んでる？それとも、私を選んだバイクを恨んでる？」
亜弓「さあね」
亜弓・マヤ「どうかしら／どうなの？」
亜弓「何でも人に聞いて答えが返ってくると思ったら大間違い。いつでも誰かに奢ってもらえると思ったら大間違い」

音楽。

マヤ「私は…必ず割り勘にするタイプです」
亜弓「ふふふ。割り勘は割り勘でも、キッチリ払うタイプでしょ？例え小銭であっても！アナタからすればキッチリピッタリお釣りいらずの状態で渡したつもりでも、私はどうなの？万札しか持ってないのよ。ね？私が万札でまとめて払って、アナタが小銭整理気分で渡してきた大量の１００円玉や何なら５０円玉やら５円玉、１円玉までを紛れさせてまでかき集めてピッタリにして渡してきた小銭たちを、私は私の財布にしまうわけ。財布パンパン。そういうこと」
マヤ「…恨んでるのね」
亜弓「覚えてる？３人での旅。数ヶ月が経過した頃、ある小さな街の雑貨店に入った時、そう、石造りの、鳥の模様のステンドグラスの窓の付いた西洋風の可愛い建物の。みんなでお揃いのキーホルダー買おうってことになったじゃない？、私が言い出して。私は、レインボーのデザインがいいんじゃない？、って言ったわよね？それが良かったから。なのにそしたらアナタ言ったでしょ？、」
マヤ「やめて。もう何年も前のことよ。あなたにとっては小さな嫌な思い出がいっぱいでも、私にとっては全部ひっくるめて大きないい思い出かもしれないから。塗り替えないで」
亜弓「嫌な思い出の方が鮮明に覚えてるものよね」
マヤ「でも、昔の小さなことを引っ張り出して争うのはフェアじゃない。記憶が鮮明な方が有利なだけだもの」
亜弓「在るものを否定して、無いものを説明するのね」
マヤ「エドガーアランポー？」
亜弓「あら、読んだ？」
マヤ「ポー！あ、はい！…ごめんなさい」
亜弓「謝らないで。私にとっての世界は一つじゃないの。どんな過去も、私にとっての世界の一つ」
マヤ「恨み、も？」
亜弓「かつて愛した人を今は『死ぬほど許せない』って思ってる。でもそれって、いつか許したい、いつか会いたい、私を忘れないで欲しい、ってことなのかもね。怒りや憎しみの中に、愛があったりするってこと。そうじゃない？」
マヤ「私は、そんな格好いいこと言えないから」
亜弓「じゃ、格好悪いこと言う。…いらなくなったら教えてよ」
マヤ「…いらなくなんてならないと思う」

亜弓「どうかしらね。もう逃げなくて良くなった時、どう思うかしらね」
マヤ「いらなくなんてならないと思う」

音楽。

亜弓「じゃ、奪いに行くわ。今じゃないけど」
マヤ「いつ？アナタに勝機が味方した時？」
亜弓「いいえ。私がそうしたいと思った時。どうかな…負けるとわかってて戦う勇気が持てた時、かな」
マヤ「わかりました。…ごめんなさい、」
亜弓「大丈夫。ちょっと、大丈夫っていう自己暗示に疲れただけ。でも大丈夫。心のどこかで、アナタとヴァイクに『世界一不幸になってよ！』ってちゃんと思えてるから。久しぶりにアナタに会ったからかな。わからない。変わるかもしれないし、変わらないかもしれない。例え明日変わっても、何も悪くないでしょ？いちいち説明する必要なんてない。じゃ。ヴァイク！あ…さようなら」

亜弓、走り去る。残されるマヤ。ハゲ頭のデブおじさん（のりお）がやってくる。

のりお「泣いてんの？」
マヤ「え？」
のりお「泣いてんなら写真撮らせてよ」
マヤ「は？」
のりお「泣いてるんなら、写真撮らせてよ」
マヤ「何ですか？？」
のりお「（写真撮って）カシャッ！」
マヤ「キャッ！やめてください！」
のりお「集めてっから。泣いてる写真」
マヤ「どして？」
のりお「元気出んの。落ち込んだ時さあ、泣いてる奴の写真見て、あーコイツよりはマシかあ、とかね！」
マヤ「悪趣味ですね」
のりお「そ？落ち込んじゃった時、自分がどうやったら元気出るかぐらい、わかっといた方がいいよ。（写真見せて）見て！これ！松田聖子が郷ひろみと別れた時の記者会見の写真！すっごい泣いてんの！どう？元気でた？」
マヤ「（写真見て）出ません」
のりお「あ！正解！だってこれ嘘泣きだからねー、元気出ないよね！」
マヤ「私、泣いてないし、元気です。ただ、」
のりお「ただ？」
マヤ「わからない…」
のりお「試合に勝って勝負に負けた、ってやつでしょ」
マヤ「え…」
のりお「だからさ、オジサンは、試合出ないようにしてんの。負ける勇気ないのにすぐ試合出ちゃうから、だから、試合、出ないようにしてんの。そしたらさあ、こんなん（デブでハゲなオジサンに）なっちゃった！試合に出ないってのは例えばね、キャバクラとか行くとするでしょう？で、一番人気な子指名すんの、奮発して。でね、その子隣に座らせて、オジサンずっと本読んでんの。1個も喋らないの。で、2時間経って、延長しますか？って聞かれてまさかの延長すんの。閉店時間までずっと延長すんの。で、お会計して黙って帰るの。ね？これだと、負ける危険ないわけ。試合に出てないから。でもね、もしかしたらね、その女の子が、そんな

オジサンに興味持って、向こうからアプローチしてくる可能性も無きにしも非ずだとは思ってんの。すごいシード権、繰り上げ当選、たまにあるから。わかんないからね、運命は」
マヤ「じゃあ、オジサンは、集めた泣いてる人の写真、どんな時に見るんですか？」
のりお「ん？だから落ち込んだ時だよ」
マヤ「どんな時に落ち込むんですか？試合に出ないから負けないのに」

音楽。

のりお「もう自分は試合に出れないんだなって、改めて感じた時かな。試合や勝負に負けるより、試合に出ないって方がどんだけ屈辱、（涙が出て）あっ！（自撮りして）カシャ！あはは。泣いてる写真！」
マヤ「…」
のりお「お嬢ちゃん、もし時間あるなら、オジサン、自分より弱ってる人間は大好物だから、オジサンが、人生の測量が得意で、そんなオジサンが産んだ息子が、オジサンの遺伝子を継承しまくっちゃって、だから、オジサンは、息子にも告げず、少女からオバサンとなり、そしてオジサンになった訳で、それは屈辱という点では、」

都知事候補の事務所開きの設営準備のため、女性が2人（チッチ、謡子）、椅子などを持ってドヤドヤやってくる。

チッチ「ちょっと！そろそろ！始まりますよ！」
のりお「わ。もうそんな時間か！」
謡子「邪魔ですどいてー！」
のりお「すんません！あ、お嬢ちゃんごめんね、オジサンちょっと、」
マヤ「私、泣いてませんから！！」

走り去るマヤ。

【6・都知事選】

選挙事務所。事務所開きの決意表明会見。選挙対策女性コンサルタント（速水）と町内会会長（西島）が、候補者（長井和貴子）と支援団体員・長井軍団（のりお、チッチ、謡子）と対面している。
アタック音。

長井「今日は、お集まり頂き、」
長井軍団「ありがとうございます！」
長井「どうしても、世の中を変えたくて、どうしたらいいかなってずっと考えて、結果、都知事に立候補することにしました！」
のりお「初めての立候補ですので！」
チッチ「今まで立候補したことはないです！」
謡子「今まで立候補したことはないので！」
のりお「初めての立候補だということです！」
速水「初めての立候補だから色々わからないってことですよね？」
長井軍団「正解！なので、」
速水「選挙事務所の構成員、つまりコンサルティング兼ブレイン、サポートチームとして我々を集めたということですよね」
長井軍団「正解！」
速水「私、この度選挙コンサルティング、主に選挙区情勢の的確な調査・集計・比較分析など、目的達成のための圧倒的かつ繊細なリサーチを担当させていただきます速水です。因みに、私が担当させていただいて落選なさった方は1人もおりません」
長井軍団「本当ですか？」
速水「はい」
長井軍団「本当ならすごいですね！凄い人が来たもんだ！」
速水「…ありがとうございます」
長井軍団「どういたしまして！どうぞ！」
西島「えー、この度、我々の商店街に事務所を設け、立候補なさる、ということで、町内会の益々の発展のチャンスと思い、全面的に協力させて頂くことになりました、町内会会長、西島でございます」
長井軍団「本当ですか？」
西島「何が、ですか？」
長井軍団「何が？？」
西島「いえ、何を疑ってらっしゃるんですか？」
長井軍団「全てです！世の中全てを疑ってかかるのが政治だと、点を線にするのが政治だと、坂上忍さんが仰ってらした気がするので！…（ハアハアハア）初めての立候補です！お察しください！」
西島「はあ」
速水「では早速ですけど、まず世の中を変えたい、ということですが、具体的にどのような点でしょうか」
長井軍団「点？（ハアハアハア）おかしいな、と思う点です！」
速水「例えば？」
長井軍団「例えば！？（ハアハアハア）世界を変えたいって言うか、あ、税金を、無くしたいです」
速水「全部ですか？」
長井軍団「全部？？パッ！」
速水「わかりました。では、先生の経歴を簡単に、」

長井軍団「高校を卒業して、バイト、って感じです」
西島「高卒なんですね」
長井軍団「ダメですか？」
速水「いえいえ、今は学歴差別なんてしたらそれこそバッシングされる世の中ですから、高卒ってのは、逆に強み、有利に働くとも限りませんよね」
西島「バイトはどんなバイトを？」
長井軍団「まずはプロントで」
西島「コーヒー屋？」
長井軍団「どうなんでしょうか」
西島「え？プロントって言ったら、言わずもがな大手コーヒーチェーン店ですよね？」
のりお「でも、コーヒーはパックですし！」
チッチ「パスタとか！」
謡子「夜はお酒も出しますので」
長井軍団「コーヒー屋という括りにしていいのか、今後疑うべき点です」
速水「何年ぐらい？」
長井「７年です」
のりお「８年です」
チッチ「９年です」
謡子「１５年です」
西島「長いですね。うちの店でもそんなに長く続いたバイトの子いないなあ」
長井軍団「それは私共にはわかりかねます点です」
西島「そりゃそうだ」
速水「プロントで働き始めたきっかけっていうのは」
長井「友達に誘われて。誘われた私が１ヶ月以上働いたら」
のりお「誘った私にも」
長井「誘われた私にも」
長井軍団「時給とは別で２万円が入るから、という点です」
西島「２万円」
長井軍団「はい。２万円もらいましてん」
速水「では、その後、先生もどなたかご友人を誘ったりしたんですか？」
長井軍団「何にですか？」
速水「ですからプロントの。バイトに」
長井軍団「してないです！友人に誘われたという点、２万円もらったという点、７年（８年、９年、１５年）働いたという点！これで点が線になりませんか！」
のりお「点と線！」
チッチ「松本清張！」
長井軍団「知りません？」
速水・西島「もちろん知ってます」
西島「お好きなんですか？」
長井軍団「はい！読んだことはないです！世田谷には、点と線という名前のラーメン屋さんがあります！（ハアハアハア）初めての立候補です！お察しください」
速水「失礼ですが、ここは単刀直入に。正直、選挙資金はおいくらぐらい」
長井軍団「（ハアハアハア）せーの！３００、あ、５０万円です」
西島「これはドブ板選挙覚悟ですねー！」
速水「ですねえ」
のりお「…よし！じゃ、先にポスターの写真撮っちゃいましょうよ！ね！」
長井「はい！お願いします！」

上着を脱ぎだす長井。

のりお「え、着替えるの？」
長井「あ、脇見せでいきたいんで」
のりお・チッチ・謡子「脇見せ？？」
長井「私、ずっと脇毛伸ばしてて。ムダ毛全身脱毛が主流の世の中だけど、ムダ毛かどうかは私が決める！ボーボーの女の子がいても、ツルツルの男の子がいても、いいじゃないですか！私、そういう世の中にしたいんで！価値観は常に自由でなくてはならないんです！」
速水「ちょっと！」
西島「毛穴という小さな黒い点が、脇毛という黒い線になって行く、ってかぁ？」
速水「そういうの！そういうの聞かせてくれなくっちゃ！」
長井軍団「え？」
西島「え？！」
長井「そしたら、正直こういう事務所とかだと緊張して全員でセリフ言っちゃうんで、プロントとか行っていいですか？」
速水「もちろん！」
のりお「となると、事務所必要ないですね。経費削減の為にもすぐに解約したほうが」
西島「毎回、プロントで打ち合わせ？」
速水「いいんじゃないですか？オープンな感じで！選挙事務所は恐らく４人のバイト先プロント！これでいきましょう！」
西島「好感度上がりそうですね！」
長井「ありがとうございます！」
速水「じゃ、早速移動しましょう！！」
長井・西島「はい！」

長井、速水、西島、ドヤドヤと退場。
不動産屋の女（風子）がやってくる。舞台転換開始。

風子「あれ？先生は？」
のりお「あー」
風子「今日、事務所開きでしょ？契約にきたんだけど」
のりお「事務所、解約するっぽいですよ」
風子「へ？」
のりお「プロントで選挙事務所やるみたいで」
風子「へ？」
のりお「とにかく、すんません、この事務所は解約です」
風子「ちょ、待ってよ！こんな商店街の中で１階の路面に面した好物件、家賃も発生させずこっちの好意で１週間抑えてたのよ？解約って、契約もまだ正式にはしてないのに解約って！」
のりお「泣いてんの？」
風子「泣いてはないわよ」
のりお「泣きなよ。社長に怒られること想像して泣きなよ」
風子「は？」
のりお「え、泣けないの？すぐ泣いたりできないタイプ？」
風子「は？」
のりお「だから、台本に『泣く』って書いてあるのに、泣いたりできないタイプの女優さんですか、って聞いてんの」

風子「台本に『泣く』って書いてあるんだったら、すぐ泣いたりできるタイプの女優さんです」
のりお「本当に？」
風子「死んだ猫のこととか、死んだ犬のこととか、○○のこととか思い出したらマジですぐ泣けます」
のりお「いやいや、いいいい！オマエのそういうプライベートとかどうでもいいからさ、もっと嘘でもいいからさ、裏切られたとか、見返してやるとか、浮気されてドロドロとかさあ、そういうの聞かせてよ！」
風子「そんなの思いつくならとっくに月9とか日テレ深夜枠とかのドラマ書いて稼いでるってのー！こんな劇場でやってないよ！」
のりお「こんな劇場って失礼でしょ！」
風子「そりゃ、こんな状況下で1ヶ月も貸してくださって非常に感謝はしてますよ！本当にありがとうございます！でもさ、本当はこんな劇場じゃなくて、こんな（本多）劇場で、こんな（本多）劇場グループの最高峰、こんな（本多）劇場でやりたいんだよ！」
のりお「こんな（本多）劇場ね、そうだね、でも、こんな（本多）劇場さんには、1週間以上やらないなら貸せません、って、断られたじゃん！泣けた？」
風子「泣けないよ！こんな劇場でも満足してるから！」
のりお「私だってだよ！やっぱり公演やらせて頂けるだけで感謝なんだよ！だって私、春に公演中止になった時、泣いたもん！」
風子「泣いてたね！すごい泣いてたね！堰を切ったように泣きあげて、私が泣く余地ないくらい泣いてたね！」
のりお「ごめんね、でもだってさあ、もう芝居もだいたい出来上がってて、でさあ、通し稽古中に、なんか、ヒュッって音響さんと目が合ったら凄い悲しそうな顔してたから、あれ？、私なんか芝居間違えてる？面白くない感じでやっちゃってる？なんて思いながらやってて。そしたら、その通し稽古真っ最中に関係者各位に中止のお知らせメールが届いてたっていう、ね」
風子「ちょっとやめてよ」
のりお「あ、この話するべきじゃなかった？」
風子「いや、するべきじゃないっていうか、むしろ私がもっと正確に話したいから」
のりお「泣く？」
風子「泣きはしないよ！まあ、中止になるのは致し方ないことなのは理解できるけど、やっぱりね、作演出してる私にも事前に連絡もなくね、キャストもスタッフも全力でやってる通し稽古真っ最中にプロデューサーから一斉メールで中止を知らされるって、やっぱり辛いですよね。結局その通し稽古が作品の最後になるわけだから、なんでその場に駆けつけてその目に刻まないの？、って思うし、せめて、通し稽古やってることぐらいわかってるんだから、どうして終わるまでメール送信待てなかったの？って思うよね。愛がないよね。そこが一番悲しい」
のりお「本当にそう！泣いた？」
風子「だから泣いてはないよ！あ、でも最近泣いたことあったわ」
のりお「なになになになに！！」
風子「すごい地味な話？、地味な涙かもしれないけど、」
のりお「いいよいいよ」
風子「ずっと良くしてくださってたっていうか、仲よかったり親交あったりとかいう人とかと、急に連絡取れなくなったりするのが、すごい悲しい」
のりお「そうだね。いくら電話して着信残しても、今までだったらすぐ折り返してくれてたのに、留守電入れても全くかけてきてくれなくて、もちろん、なかなか直接会いに行ったりできない時期だし、本当は直で会って喋りたいけど、仕方なくメールしたら、『なんのご用ですか』って返信きたりしてね」
風子「なんだろうね、黙っていきなり辞めちゃうバイトとかじゃないわけだし、何年も続いていた関係があるわけだから、突然そういう態度に出られると、こっちがどんな悪いことし

ちゃったんだろう、何が嫌だったのかな、何があったのかな、楽しかったとか仲良しとか思ってたのはこっちだけで、ずっと嫌だったのかな、とか、理由がわからないだけに過去を否定していく作業が始まっちゃうんだよね。その上、だとしても、謝るチャンスももらえない、っていうね」
のりお「そうなんだよー。まだ恋愛ならね、突然いなくなられたら、ああ、嫌になったんだね、別れたいんだね、って思えるけど、そうじゃない関係での突然の拒絶って、すごく辛いよね」
風子「辛いね」
のりお「だから、私は、記子は、急に連絡取れなくなるような人には絶対ならないから。ね、だからレオも、絶対そうならないで。嫌なことあったらはっきり言って。絶対電話出て！掛け直してきて！私、解決するから！絶対大丈夫だから！」

＊諸々あって、良きところで。

開店準備が整ってるダイナー。店の2人（西島、マヤ）が迷惑そうに（？）見ている。

西島「あのー、開店準備整いましたんで」
風子「はい」
西島「…開店準備整いましたんで！」
風子「あ、邪魔ってこと？はっきり言ってよ！」
のりお「泣いた？」
風子「泣いてないよ！」
のりお「なんでよ！鉄の女かよ！いつもの！」
西島「はい、親子丼！」

去っていく風子。

【7・ダイナー→エンディング】

庶民派な、統一感のない年季を感じさせる店内。営んでいるのは、地味な夫婦（西島、マヤ）と思われる2人。長井の選挙ポスターが貼ってある。1つのテーブルには、客（に扮した亜弓）。電話として存在する男（電田）。

マヤ「いつもの？」
亜弓「はい」
マヤ「アメリカンと生姜焼き定食！」
西島「はいよ！」

西島が出した料理を運ぶマヤ。

マヤ「どうぞ」
亜弓「ども！」

カランコロンカラン。

西島・マヤ「いらっしゃいませ～！」

女性コンサルタント（速水）、来店。早速店内をギョロリとジロジロ観察。

西島「速水さん！お待ちしてました！」
速水「いえいえ」
西島「（マヤに）こちら、速水さん！」
速水「どうも」
マヤ「わ～、お忙しいところ、この度はすみません！主人から、お噂はかねがね！物凄いコンサルティング力だって」
速水「普通ですよ。奥様？」
西島「まあ、一応」
マヤ「内縁の、妻です」
速水「内縁の？籍入れてらっしゃらない？フランス式ですね。店はしみったれてるのに！あはは！」
マヤ「あはは！ねえ、でももう、速水さんに来ていただいたらもう、安心！」
速水「諸々赤字続きだとご主人から伺いまして、まあ、やるからには全力でサポートさせていただきます！」
西島・マヤ「宜しくお願いいたします！」
マヤ「常連さんで何とか持ってるような感じなんですけど、このところその客足もガクンと、ねえ」
西島「うーん」
速水「特に何の売りもなさそうな感じですもんね」
マヤ「ホ～！！」
速水「早速ですが、店名を変えましょう」
西島・マヤ「え？！」
速水「西島さんの店だから『西島コーヒー』ってのはわかりますけど、地味ですしね。思い切って西を上に変えて『上島珈琲』にしましょう」
マヤ「『上島珈琲』って、あの大手珈琲チェーンの」
速水「はい」

西島「でもウチ、フランチャイズとかでもないですし」
速水「ですから、本家は珈琲は漢字表記なんで、こちらは、コーヒーはカタカナ表記にしましょう。それでもね、勘違いして入ってくる客は増えると思いますよ。そんなもんです」
西島「はあ」
速水「ゴミ袋ください」
マヤ「え、あ、はい！」

ゴミ袋を渡す。店内の装飾品をどんどんゴミ袋に入れる速水。

マヤ「え？」
速水「統一感がなさすぎるんで。処分します」
西島「ああ！それ！2人でニセコに行った時に買った暖簾！」
速水「ここはニセコですか！北海道料理が売りなんですか！」
西島「いえ…」
マヤ「ああ！それ、常連のお客さんたちがパチンコでとっては持ってきてくれてるんです」
速水「ここはパチンコ景品交換所ですか！」
マヤ「イエ～イ！」
速水「これは？」
マヤ「あ、花、です。…あの、裏にお墓があって…だいたい2日ぐらいで処分されちゃうから、可哀想だなって思って」
速水「お墓にお供えされてるお花を泥棒して飾ってる？」
マヤ「泥棒って、あの…」
速水「墓場から盗んだ仏花飾ってる飲食店、あります？」
マヤ「でも、お花はお花だから…」
速水「私、帰りましょうか」
西島「いえいえいえいえ！捨てましょう！捨ててください！捨てます！！」

花をゴミ袋に入れるマヤ。
カランコロンカラン。

西島・マヤ「いらっしゃいませ～！」

常連客（に扮した宮本）が入ってくる。

宮本「どうも～！」
マヤ「はい、いらっしゃい！ありがとうね～！いつもの？」
速水「ちょっと待ってください！！」
マヤ「え？」
速水「言葉を変えましょう。『いつもの！、なんてオーダーじゃわかんねーからな！』これでお願いします」
マヤ「え？」
速水「覚えました？『いつもの！、なんてオーダーじゃわかんねーからな！』です」
マヤ「でも、」
速水「いいですか？何の特徴もない喫茶店で生き抜いていくには、常連への特別扱いを廃止すること！常連を特別扱いしたからといって、常連が常に通うとは限りません、それどころか！新規の客が来づらくなります。『ああ、常連が集まる店だな、入りづらいな、居心地悪いな』、そうなるわけです！」
マヤ「でも、」

速水「でもでも、って言う暇あったら!デモクラシー起こしましょうよ!」
マヤ「デモクラシー?」
速水「お客様は平等です!」
マヤ「でも、あ!」
速水「私、帰りましょうか」
西島「いえいえいえいえ!ほら!マヤ!」
マヤ「(常連客に)いつもの!、なんてオーダーじゃわかんねーからな!」
宮本「?!え?いつもの!」
マヤ「とんかつ定食と食後にアイスコーヒーで!」
西島「はいよ!」
速水「帰ります!」
西島「いえいえいえいえ!私!行きます!(常連客に)いつもの!、なんてオーダーじゃわかんねーからな!」
宮本「え?どしたのマスター」
西島「ヒィ!(定食を渡して)ありがとうございます!」
速水「西島さん!」
西島「すみません!!」
速水「お店、変えていくつもりあるんですか?」
西島・マヤ「あります!」
速水「お店の存続がかかる緊急事態なんですよ!危機感!緊張感!そしてお店の売り!」
西島・マヤ「危機感!緊張感!そしてお店の売り!」
速水「ご理解いただけたのなら、奥さん、」
マヤ・西島「はい!」
西島「あ、間違えた」
速水「パンツ脱ぎましょう」
西島・マヤ「え?」
速水「パンツを脱ぐんです」
マヤ「今、ここで、ですか?」
速水「今ここで、です」
西島「何故?」
速水「もちろん、風俗ではないのですから、決してノーパンの下半身をお客に見せる訳ではありません。緊張感です!ダラダラとした接客、締まりのない店内!何の売りもない話題にもならない店!そこで!奥さんがパンツを脱いで接客する!当然スースーする下半身!下半身にギュッと力を入れる緊迫感!恥ずかしさもあって、奥さんには緊張感が走る。自ずと、その緊張感は店全体を包み込む!いつの間にか『あそこの奥さんノーパンで接客してるらしいよ』そんな噂がお店の売りとして街中を走る!結果!お客が殺到!パッとしない店を蘇らせるコンサルティング界の超常套手段です!」
マヤ「でも、」
速水「デモクラシー!」
マヤ「あなた…どうしよう」
西島「あの、すみません!1つだけ、言わせてください!」
速水「どうぞ」
西島「妻が、自分の妻が、客の前にノーパンで立つ…想像に絶することです。私は心配なんです。店内で、客の前でノーパンだなんて、あまりにも…不衛生ではないでしょうか!」
マヤ「あなた!!」
西島「一応、料理人として食品を扱ってるんで。衛生的な面でちょっと、」
速水「ご心配なく。女性の下半身は、美しいですから。それに下半身に食品を挟んで運ぶ訳じゃありませんから」

マヤ「あなた…」
西島「納得しました」
速水「早くパンツ脱いで！（視線をそらして）脱いだら言ってください！」
西島「マヤ！」

照明チェンジ。
亜弓、サンサーラを口ずさむ。マヤ、意を決してパンツを脱ぐ。

マヤ「…脱ぎました…」
電田「ジリリリリ！ジリリリリ！」
速水「電話です！」

内股を擦るようにヨタヨタと電話（電田）に近づき、受話器を取るマヤ。
（受話器を取る直前、マヤは電話（電田）にぶつかる。電話に命が吹き込まれる瞬間。）

マヤ「はい、西島、いえ、上島コーヒーでございます！」

強風。
カランコロンカラン。やってくる女性客（風子）。

風子「やってます？」
速水「！意味ありげ風だ！！」

さらに強風。音楽。照明チェンジ。

電田「ジリリリリ！奥さんの受話器を掴んだ手は震えていた。その震えが僕に伝わり、ただの電話だった僕の心臓を動かし始めた。途端に僕は電話であることがバカバカしくも忸怩たるものに思え、ノーパンという含羞で頬を染める奥さんの恥辱と、一本の線で繋がったのです。屈辱という一本の線で！」

強風。

速水「電話をかけているのは自分です！アナタが恥ずかしそうにヨタヨタと受話器を取りに向かう姿を眺めながら、なんとか、自分の中のアナタを葬ろうとしているのです！アナタに行く末を嘆き悲しまれ、そしてアナタの手で殺された自分です！そこに憎しみは存在せず、儚い愛がありました！今も尚！肌身離さず装着しています、アナタの尊いオサゲを！（オサゲを外して）なのに、あっさりバイクに乗って消え去ったまま時は過ぎ、こんな冴えない男の内縁の妻として身を隠していたなんて！僕だったら！僕だったら！」

強風。

のりお「比べるのはやめなさい！息子よ！人生の測量士は母だけ、いや、父だけで十分なのです！」
電田「ジリリリリ！」

駆けつける長井。しかし長井を気にする人間は皆無。

長井「電話をかけているのに、何故誰も出てくれないのですか?当選しました!私、当選しましたよ!」

強風。

速水「母上!軽はずみに父上になるのはやめてください!父上になって尚!他人の涙を集め比べるのはやめてください!」

強風。

のりお「泣いているのですか!泣いているのでしたら写真を撮らせてください!敗北と落胆の折々に眺め比較し、元気をいただきたいのです!」

速水とのりお、接吻。頭上から舞い降る真紅の薔薇。

長井「どうして喜んでくれないのですか?私が当選したのに!世界は変わるかもしれないのに!」

強風。

速水「やめてくれよ、恥ずかしい!」

強風。

宮本「マヤちゃん!僕は本当にマヤちゃんのこと、外人モデル並みのスタイル、パッチリ二重、艶やかな黒髪、高貴で華やかな仕草、高嶺の花、って思っていたよ!いや、正確に言えば、好きという気持ちを伝えるにはそう言うしか思いつかなかったんだ。夏目漱石が『アイラブユー』を『月が綺麗ですね』と表現したように、僕にとっての『アイラブユー』だったんだ!だから待ってた!ずっと!宮本武蔵は待ちぼうけだよ!」

速水とのりお、再び接吻。頭上から再び舞い降る真紅の薔薇。成功者の装いへと変わるマヤ。

マヤ「わからなかった…何もかもわからず、全てが恥ずかしかった」

強風。

西島「バイクだった俺を覚えてるかい?怯えながら俺に跨るマヤ、逃げ続けなくてはならないマヤには、俺が必要だと思った。いつしか調理師免許を取得し、大型二輪の免許は期限切れ。日陰ながらも穏やかな日々。だけど思う。オマエ、別に逃げる必要何もなかったのにな!」

強風。

亜弓「バイクを返してよ。私がヘリを破壊したように、奪うなら私を破壊してから逃げて欲しいのです。全てを背負う覚悟で!国道でバイクを降りた私は、ずっと屈辱の中にいるのです!でもそれは私の運命の一つであり、運命なんていくつも存在するのです!」

激しい強風。

マヤ「恥ずかしさから逃げたくて、でも屈辱の砂は逃げても逃げても追いかけてくる。そして気付く。振り払いたかった屈辱という砂たちが、私を支えているのだと！」
電田「ジリリリリ！」
風子「社長！世紀末が近づいております！」
マヤ「かしこまりました。全ての砂漠を、屈辱という砂を、一粒残らず買い集めてちょうだい！」
電田「ジリリリリ！」
風子「（受話器を取って）お電話ありがとうございます、屈辱不動産でございます！！」

再び上空から降り始める白い砂。

マヤ「都会の高層ビルの屋上に取り残された砂漠の中の不動産屋！屈辱を担保に、屈辱を保証人に、アナタの居場所を提供いたします！お客様が預けていった屈辱と言う名の一粒一粒の砂が集まるこの砂漠。私は、私の屈辱塗れの人生を担保に、この砂漠を手にしたのです！」

降り続け、流れ続ける白い砂。

♪M4『ただやるだけ』（詞：澤田育子　曲：中村中）

後の始末を考えると　ひとり
足がすくんで　躊躇することばかり
お金もないのに　やりたいという気持ち
我慢できたら　どれほど楽だろう

時が過ぎるのを静かに待てたなら
流す涙は少なくて済むかも知れないけど
涙を流れ星に変えることできたなら
眠れずにいる誰かに届くかも知れないから

Thanks & Love！　何も恐れず　やり抜く強さ欲しいけど
乱暴に生きたくはないから　優しく歌い　激しく踊ろう
お願い！　やるだけだから　今は　ただやるだけだから
どうか　世界よ今こそ　平和であってください

T！E！A！N！K！S！っ謝！
L！O！V！E！愛！愛！愛！愛！
T！E！A！N！K！S！っ謝！
L！O！V！E！愛！愛！愛！愛！

わがままなのかも　知れないよね私
知らずに誰かを　傷つけたこともあった
自分の全部が　キライになっちゃった夜
身動き取れない　恥ずかしい　恥ずかしい

だけど　忘れないで　「恥ずかしい」のその中に
光　見つけたこと　その光　追いかけた日のこと
たとえ今はまだ口も利きたくなくても
いつの日か　時が来たら　キツめに抱きしめさせて

Thanks & Love！　何も恐れず　やり抜く強さ欲しいけど
乱暴に生きたくはないから　優しく歌い　激しく踊ろう
お願い！　やるだけだから　今は　ただやるだけだから
どうか　世界よ今こそ　平和であってください

お願い！　やるだけだから　今は　ただやるだけだから
どうか　世界よ今こそ　平和であってください

T！H！A！N！K！S！っ謝！
L！O！V！E！愛！愛！愛！愛！
T！H！A！N！K！S！っ謝！
L！O！V！E！愛！愛！愛！愛！
愛！愛！愛！愛！愛！あっ！
Thanks & Love！

おわり

＊転載・複製、無断使用を固く禁じます。